

# 開催報告書

## 第9回国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) 世界大会

### The Ninth World Congress of the International Council for Central and East European Studies

——幕張 多くの西と多くの東が会うところ——

*Makuhari — Where Many Wests Meet Many Easts*

千葉市幕張、2015年8月3日～8日

Makuhari, Chiba City, August 3-8, 2015



幕張メッセ・コンベンションホールでの開会式



会場の神田外語大学 (7号館)

第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会組織委員会

The Organizing Committee for the Ninth World Congress of ICCEES

# 開催報告書

第9回国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) 世界大会

**The Ninth World Congress of the International Council  
for Central and East European Studies**

——幕張 多くの西と多くの東が会うところ——

*Makuhari — Where Many Wests Meet Many Easts*

千葉市幕張、2015年8月3日～8日



幕張メッセ・コンベンションホールでの開会式

Makuhari, Chiba City, August 3-8, 2015



会場の神田外語大学（7号館）

第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会組織委員会

The Organizing Committee for the Ninth World Congress of ICCEES

Посвящается памяти о шести невероятно жарких днях  
в Макухари, которые потрясли наше мировоззрение.

本冊子は、2015年8月3日～8日に千葉県千葉市幕張（幕張メッセおよび神田外語大学）において行われた第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会（The Ninth World Congress of the International Council for Central and East European Studies）の公式開催報告書である。

編集 第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会組織委員会  
編集者代表 下斗米伸夫・沼野充義  
編集協力 亀田真澄・北井聡子  
デザイン・DTP 島袋里美  
発行 第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会組織委員会事務局  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学文学部現代文芸論研究室内  
E-mail: makuhari@l.u-tokyo.ac.jp  
HP: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/>  
発行日 2016年7月19日

© 第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会組織委員会

本冊子からの複製、転載などをご希望の方は、必ず組織委員会事務局までご連絡ください。

## はじめに

第9回国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) 世界大会は、2015年8月3日から8日にかけて、千葉県千葉市の幕張メッセおよび神田外語大学を会場にして開催された。ICCEESは1974年に創設されてから今回で第9回大会を迎えたが、アジアにおける開催は今回が初めてで、中欧・東欧、スラヴ・ユーラシア研究者を中心に、49カ国から1310名が参加した。

この学会の準備・実施にあたっては、共同主催者である日本学術会議、会場を提供された神田外語大学の他に、外務省、千葉県、千葉市、日本政府観光局、ちば国際コンベンションビューロー、千葉商工会議所や、その他多くの企業や民間団体、そして数多くの研究者や個人の支援者にご協力をいただいた。こういった力強く暖かい援助なくしては、我が国で行われる人文社会系の学会としては稀に見る大規模国際学会を実施することは不可能であった。ご協力くださったすべての関係者の皆様に、改めて深甚な感謝を表ささせていただきたい。

ここに実施報告書を取りまとめ、大会の成功をご報告申し上げられることになったのは、本大会の準備と実施の全体に責任を負う組織委員会として大きな喜びである。5年を超える準備期間を含め、大会開催のための活動を担ってきた34名の組織委員たちの努力の結晶として、ここに開催報告書を提出する。

2016年6月29日

組織委員長 下斗米伸夫 (法政大学教授)

組織委員長 沼野充義 (東京大学教授)

## ICCEES 世界大会を日本で行った意義について

ICCEES はスラヴ・ユーラシア研究のナショナルセンターを糾合する世界組織である。しかしながら、1985年にワシントンDCで世界大会を開催して以降、5回連続して大会をヨーロッパで開催するという異常事態が生まれ、世界組織としての権威は著しく傷ついた。たとえば、最大加盟団体である米国のASEEESは、2010年以降、ICCEESへの加盟分担金を上納するのを止めた。また、社会主義体制崩壊から25年経ち、スラヴ・ユーラシア世界を西からだけではなく、南から、東から見る視点を付き合わせる機が熟していた。幕張以外にグラスゴーが2015年世界大会誘致を行っていたが、上記の理由で幕張での開催は容易に決まった。

国内的な事情として、日本のスラヴ・ユーラシア研究は、国際化が遅れている日本の文系学問の中では例外的であるということがあげられる。たとえば、幕張での世界大会開催を決めた2010年のストックホルム世界大会には、約60名の日本人研究者が参加し、そのほとんどが報告した。今回、世界大会が幕張で開催されたことにより、400名を超える日本人研究者が参加し、そのほとんどが報告した。これは、日本のスラヴ・ユーラシア研究者の約半分が、英語またはロシア語で報告したということである。世界大会実施により、日本のスラヴ・ユーラシア研究の更なる国際化がもたらされたことは疑いなく、残る課題は400件近いペーパーを、できるだけ多く国際的な査読雑誌・論文集に載せることである。

2016年6月29日

組織委員会事務局長 松里公孝（東京大学教授）

## 第9回国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）世界大会

### 目次

はじめに	03
1. 実施概要	06
2. 支援	10
3. 組織	14
4. 参加者とその受け入れ態勢	18
5. プログラム	20
6. 大会運営	31
7. 準備活動	36
8. 関連行事	38
9. フィードバック	41
10. 成果発表	44
11. 総括——成果と展望	46

付録

## 1. 実施概要

### ICCEES とその世界大会について

ICCEES (The International Council for Central and East European Studies、略称 [イクシーズ]) は旧ソ連・東欧圏の研究に携わる各国の学会を糾合した、総合的地域研究の国際組織である。その視野はロシアを中心としながらも、中欧・東欧諸国、ウクライナ、コーカサス、中央アジア、モンゴルにまで、つまりロシア・中央ユーラシアのほぼ全域に及ぶ。ICCEES は 5 年に一回、世界大会を開催してきたが、この大会が欧米の外で行われるのは史上初めての画期的なことだった。今回の幕張大会には、旧ソ連諸国、欧米、アジアなど 49 カ国から 1310 人の参加者があり、政治、経済、国際関係、歴史、社会、文学、芸術、言語、宗教など、あらゆる専門分野にわたって最新の研究成果が発表され、討議された。

### 期間

2015 年 8 月 3 日 (月) ～ 8 日 (土)

### 会場

千葉県千葉市幕張地区

8 月 3 日 幕張メッセ 国際会議場 (千葉市美浜区中瀬 2-1)

8 月 4 日～ 8 日 神田外語大学 4・6・7 号館 (千葉市美浜区若葉 1-4-1)

### 参加者

49 カ国、1310 名

\* 国の数は立場によっては 48 カ国プラス 1 地域という数え方になるが、本報告書では過去の ICCEES 大会の統計の取り方にならって 49 カ国と表示する。

### 主催 (共同主催)

- ・ 国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) (会長 2015 年 8 月まで Graeme Gill / 2015 年 8 月から Georges Mink)
- ・ 日本学術会議 (会長 大西隆)
- ・ 日本ロシア・東欧研究連絡協議会 (JCREES) (代表幹事 沼野充義)

JCREES は、以下の 6 つの加盟学会によって構成される協議会である。

ロシア・東欧学会、日本ロシア文学会、日本スラヴ東欧学会 (JSSEES)、ロシア史研究会、比較経済体制学会、日本スラヴ学研究会

## 参加者内訳

総計 1310 名（日本 517 名、海外 793 名）

その内、公式登録者 1209 名（日本 426 名、海外 783 名）

その他の参加者 101 名（日本 91 名、海外 10 名）

\*その他の参加者とは、来賓、プレス、企業研修、ICCEES 本部事務局、公開イベント来聴者などを指す。

国別の内訳は、日本 91、ロシア 7、ドイツ 2、韓国 1。

## 第9回大会公式登録者 1209 名の国別内訳

国名	人数
日本	426
ロシア連邦	166
アメリカ合衆国	112
ドイツ	67
イギリス	61
フィンランド	49
スウェーデン	40
中国	33
大韓民国	23
カザフスタン	21
ポーランド	21
カナダ	19
フランス	17
ノルウェー	14
ウクライナ	13
スイス	13
エストニア	10
ハンガリー	10
オーストラリア	8
ジョージア	6
ベルギー	6
インド	5
オランダ	5
チェコ共和国	5
トルコ	5



リトアニア	5
イスラエル	4
ウズベキスタン	4
セルビア	4
アゼルバイジャン	3
アラブ首長国連邦	3
アルメニア	3
台湾	3
ベラルーシ	3
モンゴル	3
イタリア	2
オーストリア	2
スロヴァキア	2
ラトヴィア	2
ルーマニア	2
クロアチア	1
シンガポール	1
タジキスタン	1
ブラジル	1
ブルガリア	1
ボスニア・ヘルツェゴヴィナ	1
ポルトガル	1
メキシコ	1
モルドヴァ共和国	1

【参考】 ICCEES 世界大会の歴史——過去 9 回の開催実績

	開催期間	開催都市 (国名)	参加国数	参加者数	うち 日本人数
第 1 回	1974 年 9 月 4 - 7 日	バンフ (カナダ)	不明	不明	不明
第 2 回	1980 年 9 月 30 日 - 10 月 4 日	ガルミッシュ - パルテン キルシェン (西ドイツ)	32	1,415	不明

第3回	1985年 10月30日 - 11月 4日	ワシントン DC (アメリカ)	41	3,095	不明
第4回	1990年 7月21 - 26日	ハロゲイト (イギリス)	不明	約 2,400	不明
第5回	1995年 8月6 - 11日	ワルシャワ (ポーランド)	不明	約 1,400	不明
第6回	2000年 7月29日 - 8月3 日	タンペレ (フィンランド)	48	約 2,000	21
第7回	2005年 7月25 - 30日	ベルリン (ドイツ)	49	約 1,800	35
第8回	2010年 7月26 - 31日	ストックホルム (スウェーデン)	59	1,247	61
第9回	2015年 8月3日 - 8日	日本 (千葉市幕張)	49	1,310	517

## プレス

- ・本世界大会は、マスコミ各社からの関心も高く、特に初日のオープニングセッション（元首相サミット）には、ロシアの新聞社を含む40数名の報道関係者が参加し、取材を行った。
- ・期間中来場したプレス  
NHK、NHK 国際放送局、TBS、朝日新聞、産経新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞、時事通信、共同通信、日本ドットコム、テレビ愛知、ロシア新聞、TASS 通信社
- ・組織委員長沼野が読売新聞に依頼され、大会について（文学関係のイベントに力点を置いて）寄稿した（2015年9月12日読売新聞夕刊に掲載。付録2として本報告書末尾に再録）

## 2. 支援

### 日本学術会議

共同主催者である日本学術会議は、会場費（神田外語大学教室借料）の学術部分の一部、および招聘外国人滞在費の一部（総計 48 日分）を負担した。

### JCREES 加盟学会

共同主催者である日本ロシア・東欧研究連絡協議会（JCREES）に加盟している学会のうち、ロシア史研究会、日本ロシア文学会の 2 学会が主として若手研究者の大会参加援助のための拠出金を提供し、ロシア・東欧学会が研究者ボランティアの宿泊費の一部を負担した。

### 後援・協力団体

後援：外務省、千葉県、千葉市、観光庁、ちば国際コンベンションビューロー、千葉県商工会議所連合会、千葉県観光物産協会、神田外語大学、日本貿易振興機構（ジェトロ） アジア経済研究所、日本国際問題研究所、ロシア NIS 貿易会、日本ペンクラブ  
協力：独立行政法人国際観光振興機構（JNTO）、東京大学文学部現代文芸論研究室、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室、ソビエト史研究会

### スポンサー

#### ◆寄付金

株式会社山川出版社、JR 東日本、株式会社東芝、日揮株式会社、株式会社集英社、国際経済研究所、株式会社 JSN、株式会社極東書店、三井化学株式会社、阪和興業株式会社、ジェーアイシー旅行センター株式会社、中日新聞、朝日カルチャーセンター 朝日 JTB・交流文化塾、中央アジア・コーカサス研究所、株式会社グッドバンカー、株式会社中央アジアビザセンター、株式会社光文社、株式会社白水社、北海道総合研究調査会、一ツ橋文芸教育振興会、東京大学出版会、株式会社講談社、ビターズ・エンド、株式会社作品社

#### ◆協賛

JT（日本たばこ産業株式会社）、コマツ、株式会社セブン銀行、サントリーホールディングス株式会社、日本名門酒会

#### ◆参加登録料

三菱商事株式会社、伊藤忠商事株式会社、東京ガス株式会社、株式会社日立製作所、新日鉄住金エン

ジニアリング、日鉄住金物産株式会社、住友商事株式会社

#### ◆助成金

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (A) 「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」 (研究課題番号: 25243002、研究代表者 沼野充義)

国際交流基金、ちば国際コンベンションビューロー、東芝国際財団

#### 個人寄付

企業・団体以外に、個人の多くの皆様からの篤志にも与りました。以下にそのお名前を挙げて感謝させていただきます (組織委員の多くも自発的に寄付をしていますが、内部関係者であるため、ここで組織委員の名前は省略いたします)。

五十嵐貞一、岩田賢司、宇多文雄、大川繁樹、加藤九祚、亀山郁夫、川口順子、木村汎、小池百合子、酒井邦弥、田中哲二、袴田茂樹、羽場久美子、平野裕、毛里和子、山岡建夫 (敬称・肩書略、50音順)

#### 科研費およびその他の公的研究資金

大会の準備・実施のためには、上記の沼野を代表者とする日本学術振興会科学研究費 (以下、通称の「科研費」を使用する) 以外にも様々な科研費及びその他の公的研究資金が使われた。これらの経費は、組織委員会の収支決算表に反映されるものではないが、外国からの研究者招聘などに使われ、大会の成功に大きく貢献している。組織委員会が把握しているものに限って、ここに挙げておく。

1	公費名称	科研費 基盤研究 (C) 課題番号 26370882		
	研究課題名	1929 年の中東鉄道紛争と日ソ関係の転換	代表者	藤本和貴夫
2	公費名称	科研費補助金 若手研究 (B) 課題番号 25770123		
	研究課題名	現代ロシア文学・文化論におけるシニズムとナショナリズム	代表者	乗松亨平
3	公費名称	科研費分担金 基盤研究 (A) 課題番号 25243002		
	研究課題名	越境と変容 — グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて	代表者	沼野充義
4	公費名称	科研費 基盤研究 (C) 課題番号 26370400		
	研究課題名	19 世紀ロシアの哲学詩とその文化的意義に関する研究	代表者	坂庭淳史
5	公費名称	東芝国際交流財団		
	研究課題名	世界のなかの日本 — 旧ソ連圏の文学教育をめぐって	申請団体	国際中欧・東欧研究協議会 幕張世界大会組織委員会

6	公費名称	科研費・挑戦的萌芽研究 課題番号 26580065		
	研究課題名	世界文学と人文教育 — 理論的検討と教育現場での実践	代表者	野中進
7	公費名称	科研費 基盤研究 (B) 課題番号 15H03193		
	研究課題名	東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究	代表者	井上暁子
8	公費名称	科研費 基盤研究 (B) 課題番号 15H03192		
	研究課題名	ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会に関する跨境的研究	代表者	沼野恭子
9	公費名称	科研費 基盤研究 (B) 課題番号 25283001		
	研究課題名	社会主義文化における戦争のメモリースケープ研究 — 旧ソ連・中国・ベトナム	代表者	越野剛
10	公費名称	科研費 基盤研究 (B) 課題番号 24330035		
	研究課題名	競争的権威主義体制の比較研究	代表者	松里公孝
11	公費名称	科研費 基盤研究 (B) 課題番号 15H03309		
	研究課題名	ウクライナ動乱の総合的研究	代表者	松里公孝

## 謝辞——その他、数えきれないほど多くの皆様に

巨大な規模の大会であっただけに、その長い準備期間から実施・事後処理に至るまで、実務の現場の様々な局面で、さらに数えきれないほど多くの方々にお世話になりました。そのすべてのお名前を挙げることはとうていできませんが、組織委員一同にとって特に懐かしいお名前をここに記し、大会が無事実施できたのもこういった皆様のご厚意とご協力のおかげであったことを今一度思い返し、感謝させていただきます。（順不同、敬称略）

松戸きよみ、上澤美紗、土田宏成（神田外語大学）  
大岸望（千葉市経済農政局経済部 / 市民局区政推進課）  
加藤賢策（デザイナー / 株式会社ラボラトリーズ）  
葛丈夫、高橋真治、乃万博文（ちば国際コンベンションビューロー）  
鈴木武史（ちば国際コンベンションビューロー / JTB コーポレートセールス）  
高橋良平（ちば国際コンベンションビューロー / ロイヤルパークホテル）  
側嶋康博、西田有歩、王夕心（株式会社コンベンション・リンケージ）  
藪崎敦志（千葉商工会議所）  
金原主幸（日本経済団体連合会）  
山本耕二、倉光良彰、福崎靖成、鈴木勝之、見附大輔（栄養食株式会社）  
鎗田守人、中野由紀子（幕張メッセ）  
小川真菜美（株式会社サイマル・インターナショナル）  
池上周（幕張国際研修センター）  
飯田永介、森晃一郎、金子尚恭（日本名門酒会）  
伏田昌義（ジェーアイシー旅行センター株式会社）  
福井学（株式会社ロシア旅行社）  
日下泰子、甲斐高太郎（株式会社 JTB グローバルマーケティング&トラベル）  
齋藤力哉（三鈴印刷株式会社）  
中川原悠太（勝美印刷株式会社）  
高木龍介（株式会社クラフティ）  
野嶋辰伍（東京會館）  
綿引昭光（コンパッソ税理士法人）

### 3. 組織

#### 組織委員会体制図



## 組織委員一覧

組織委員会は、両組織委員長・事務局長の他、以下 31 名の日本の大学・研究機関の研究者をあわせて、総勢 34 名によって構成される（50 音順、所属・肩書は 2015 年 8 月時点）。

青島陽子（神戸大学大学院国際文化学研究科講師）＊広報部会  
 安達祐子（上智大学外国語学部准教授）＊総務・会場部会  
 伊賀上菜穂（中央大学総合政策学部准教授）  
 生田美智子（大阪大学言語文化研究科名誉教授）＊監事  
 池田嘉郎（東京大学文学部准教授）＊会計部会長  
 井上まどか（清泉女子大学文学部講師）＊会計部会  
 大串敦（慶應義塾大学法学部准教授）＊会計部会  
 岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所主任研究員）＊催事部会長  
 亀田真澄（東京大学文学部助教）＊事務局次長  
 木村崇（京都大学名誉教授）  
 鴻野わか菜（千葉大学文学部准教授）  
 越野剛（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授）＊広報部会  
 坂庭淳史（早稲田大学文学学術院准教授）＊総務・会場部会長  
 佐原徹哉（明治大学政治経済学部教授）  
 杉浦史和（帝京大学経済学部経済学科准教授）  
 瀧口順也（龍谷大学国際学部グローバルスタディーズ学科講師）  
 田畑伸一郎（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長）  
 富田武（成蹊大学法学部名誉教授）＊監事  
 鳥山祐介（千葉大学文学部准教授）＊催事部会  
 沼野恭子（東京外国語大学総合国際学研究院教授）＊募金部会  
 野中進（埼玉大学教養学部教授）＊募金部会長  
 野町素己（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授）＊広報部会  
 乗松亨平（同志社大学グローバル地域文化学部助教）＊広報部会長  
 花田智之（防衛省防衛研究所戦史研究センター主任研究官）  
 林忠行（京都女子大学学長）＊顧問  
 藤本和貴夫（大阪経済法科大学学長）＊顧問  
 黛秋津（東京大学教養学部准教授）  
 三好俊介（駒澤大学専任講師）  
 八木君人（早稲田大学文学学術院専任講師）＊総務・会場部会  
 湯浅剛（広島市立大学広島平和研究所教授）＊総務・会場部会  
 ヨコタ村上孝之（大阪大学大学院言語文化研究科准教授）



## 事務局スタッフ

島袋里美 公式ホームページ制作、プログラム冊子デザイン  
中里淳子 会計  
北井聡子 事務局補佐

## 組織委員会事務局

〒 113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学文学部現代文芸論研究室内

TEL & FAX: 03-5841-7955 E-mail: makuhari@l.u-tokyo.ac.jp

事務局の作業のために、現代文芸論研究室の他、東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室の中に専用の事務スペースを設けた。

## 顧問会議

### ・顧問会議代表幹事

田中哲二 中央アジア・コーカサス研究所所長

### ・顧問一覧 (50 音順)

青木保	元文化庁長官、国立新美術館館長
猪口邦子	参議院議員
宇多文雄	上智大学名誉教授
江田五月	前参議院議長
枝村純郎	元ソ連・ロシア大使
加藤九祚	国立民族学博物館名誉教授
亀山郁夫	名古屋外国語大学学長、前東京外国語大学学長
川口順子	前外務大臣・明治大学特任教授
川端香男里	東京大学名誉教授
木村汎	北海道大学名誉教授
小林和男	前 NHK 解説委員、前モスクワ支局長
田中伸男	笹川平和財団理事長、日本エネルギー経済研究所特別顧問
田中哲二	中央アジア・コーカサス研究所所長
中山恭子	参議院議員
袴田茂樹	新潟県立大学教授
羽場久美子	青山学院大学国際政治経済学部教授
林忠行	京都女子大学学長
平野裕	毎日新聞元専務
藤本和貴夫	大阪経済法科大学学長

松前達郎	東海大学理事長、日本対外文化協会理事長
毛里和子	早稲田大学名誉教授、文化功労者
和田春樹	東京大学名誉教授

## 学術委員

日本ロシア文学会：望月哲男（北海道大学教授）

日本スラヴ学研究会：三谷恵子（東京大学教授）

ロシア東欧学会：上野俊彦（上智大学教授）

比較経済体制学会：上垣彰（西南学院大学教授）

ロシア史研究会：土屋好古（日本大学教授）

JSSEES：林忠行（京都女子大学学長）

\*学術委員は、JCREES 加盟6学会の代表として、プログラム作成など、大会組織の学術的な側面に貢献した。

## 4. 参加者とその受け入れ態勢

### 旅費援助

- ◆海外からの参加者で所得が700ユーロ／月以下の者を対象に、上限10万円までの旅費援助（航空運賃実費分）を行った。
- ◆希望者には2015年2月28日までに申請書類を送付（メール添付）してもらい、3月31日までに組織委員会が各申請者の研究業績、収入、幕張大会での発表内容等を考慮し審査を行った。
- ◆応募総数76名のうち、58名に援助を行うことを決定。その後辞退が出たため、最終的には43名に援助を行った。旅費の受け渡しは大会期間中の本部で実施。

### ホテル予約と日本入国ヴィザ

- ◆ホテルの予約はJTBグローバルマーケティング&トラベル社に2014年9月より委託。大会HPよりICCEES幕張世界大会専用のページにアクセスし、そこから幕張周辺のホテルを「幕張公式ホテル」としてオンライン予約するシステムを構築した。
- ◆このシステムを通して予約した参加者の総数は、418人。宿泊に関するクレームの処理のために、JTBグローバルマーケティング&トラベル社には大会期間最後の2日間受付スタンドを出していた。
- ◆ただし組織委員および研究者ボランティアは、上記の「公式ホテル」ではなく、安価で神田外語大学に近くて便利な幕張国際研修センターに宿泊した。
- ◆日本入国のためにヴィザを必要とする、ロシア、ウクライナ、中国、中央アジア諸国などからの参加者のためのヴィザサポート業務は、2014年11月よりロシア旅行社とジェーアイシー旅行センター（JIC）に委託し、2015年2月から受付を開始した。
- ◆ロシア旅行社は17人、JICは204人分のヴィザサポート（有料）を行った。

### 参加登録（事前申し込み）

参加登録費の区分は以下の通りである。聴講参加者に限り、一日券も購入可。事前参加登録のためのオンライン登録システムは、コンベンション・リンクージ社に委託して構築した。

#### 1. 全期間参加チケット

全期間参加チケットに含まれるもの：開会式、全ての研究発表（パネル・セッション、ラウンドテーブル・セッション）、ブック・パネル、特別企画、ウェルカム・パーティ、フェアウェル・パーティへの参加

	2014年12月31日まで	2015年7月7日まで	現地払い
通常料金	30,000円	36,000円	40,000円
シニア料金 (70歳以上)	15,000円	18,000円	20,000円
所得割引 (月収500ユーロ以下)	20,000円	24,000円	27,000円
学生	15,000円	18,000円	20,000円

2. 一日参加チケット

10,000円

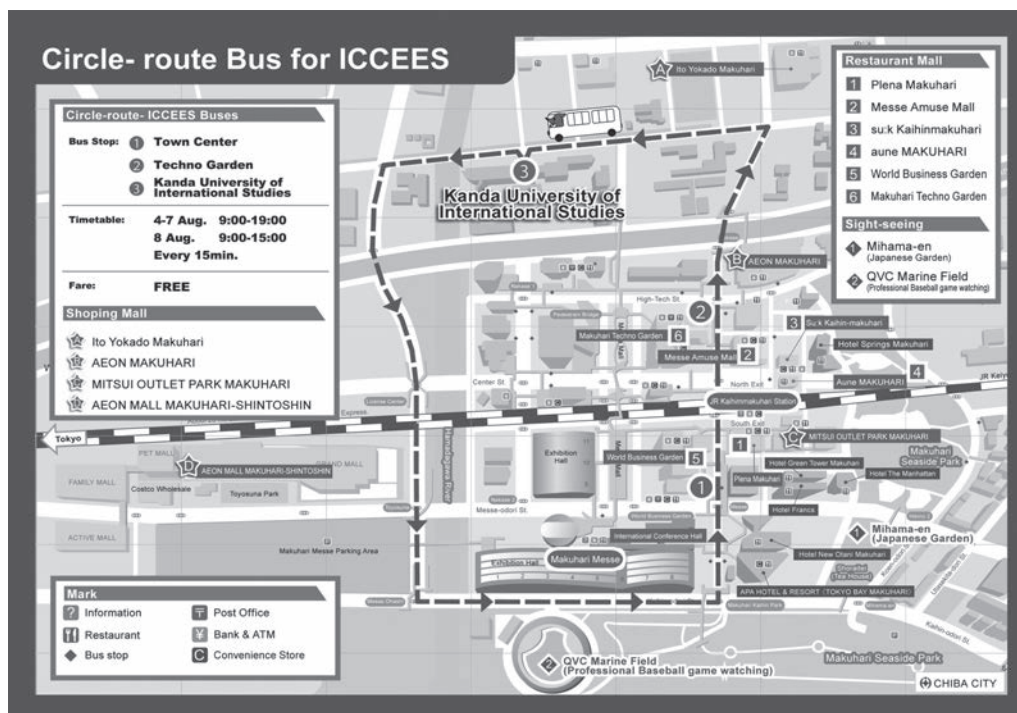
※大会で報告、討論、司会をする参加者は全期間登録のみの受付。

**循環バス**

千葉市より、神田外語大学とJR京葉線海浜幕張駅前の「タウンセンター」を結ぶ循環バスを提供していただいた。登録受け付けの際に配布するネームカードを乗車時に提示することで、参加者は無料で利用できることとした。神田外語大学は最寄り駅から徒歩15分、幕張地域のホテルからは徒歩25～30分の距離にあり、8月初旬の猛暑の中を歩いて会場に行くことは困難であったため、多数の参加者が循環バスを利用した。

2015年8月4日～7日の期間は、9:00～19:00まで、15分おき、2015年8月8日の期間は9:00～15:00まで、15分おきに発着した。

循環バスルート図 (千葉市提供)



参加者とその受け入れ態勢

## 5. プログラム



8月3日、幕張メッセの受付。



8月4日、和太鼓の演奏（神田外語大学カフェ・ラバスのレセプション）。

### 大会構成

幕張メッセ（8月3日）：開会式、ウェルカム・パーティ

神田外語大学（8月4日～8日）：パネル・セッション、ラウンドテーブル・セッション、特別シンポジウム（イブニング・セッション）、書籍展示、閉会式、フェアウェル・パーティ

### 使用言語

英語・ロシア語（通訳なし）

\*開会式のみ英語・ロシア語・日本語（3か国語間の同時通訳付き）

### プログラム

#### 冊子版プログラム

構成：203頁＋付録資料

印刷部数：2200部

編集：亀田真澄、松里公孝、沼野充義

校閲：沼野充義、松里公孝、亀田真澄、北井聡子

デザイン：加藤賢策、Mikhail Gurin、Irina Novikova、島袋里美

発行者：東京大学現代文芸論研究室内

第9回国際中欧・東欧研究協議会組織委員会

印刷・製本：三鈴印刷株式会社



表紙 デザイン：加藤賢策氏

## オンライン版プログラム

URL: <http://c-linkage.com/abs/iccees2015/program/program.html> (制作:コンベンションリンクージ社)

プログラム冊子データ入稿後の変更点は、オンライン版プログラムに反映するとともに、重要な点については正誤表を作成し当日配布した。

## 開会式

開会式では Graeme Gill・ICCEES 会長、花木啓祐・日本学術会議副会長、沼野充義・日本ロシア・東欧研究連絡協議会代表幹事、下斗米伸夫・組織委員長、松里公孝・組織委員会事務局長、熊谷俊人・千葉市長が開会の辞を述べたほか、安倍晋三・総理大臣および岸田文雄・外務大臣からの祝辞も届けられ、代読された。

## 学術セッション数 (計 380) の内訳

8月4日から8日にかけて神田外語大学で行われた学術的なセッションの総数：

パネル 333

ラウンドテーブル 46

記録映画上映 (個人提案) 1

パネルとラウンドテーブルは、それぞれテーマを立てて組織者 (organizer) が組織する。

ただし個人報告の提案も受け付けた。個人報告の提案は、組織委員会がテーマの近いものでまとめてパネルに編成し、司会・討論者を割り振った。プログラム編成作業上、この部分が最も困難で、また時間と手間がかかったが、最終的にはすべての個人報告をパネルにまとめることができた。

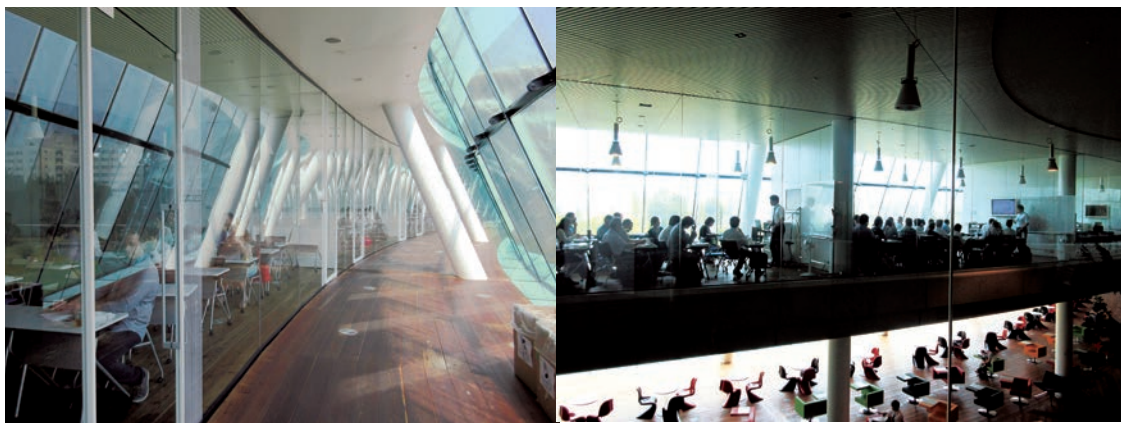
パネルは司会者 1 名、報告者 3 名、討論者 1 名を標準とする。またラウンドテーブルは司会者 1 名、報告者 4 名を標準とする。1 セッションの長さはどちらも 90 分。

### 分野別内訳

分野	セッション数
人類学 / 民族学	11
芸術 / 映画 / メディア	25
境界研究 / 超域比較	11
経済学	20
地理学	2
ジェンダー	6
歴史学	90
国際関係 / 紛争学	36
ユダヤ研究	3
言語教育	7

図書 / 情報	0
言語学	17
文学	49
哲学 / 思想	8
政治学	32
行政学 / 社会福祉	8
宗教研究	9
社会学	6
学際パネル	34
教育	2
法学	0
その他	4

### 主要分野別に見た大会の学術的意義・成果



#### 政治学・行政学・社会福祉 | 文責：大串敦（慶應義塾大学）

上記分野は便宜上政治学分野、行政学・社会福祉分野と分けられていたが、分野としても近接しており、参加者にも重なりが多いのでまとめて扱う。この分野では計 41 のパネル・ラウンドテーブルが組織された。内、政治学分野が 33、行政学・社会福祉分野が 8 であった。テーマ的には、政治体制論、政治エリート、ロシア・ナショナリズム、ロシア地方政治、ウクライナ政治、社会保障制度、などが目立ったテーマである。

前回の ICCEES 大会と比較すると以下のような特徴がみられた。第一に、世情を反映して、ウクライナ政治を扱うパネル・ラウンドテーブルが多く、活況を呈した。そのウクライナ政治のパネルを大会後半に配置したことで、大会の最後まで緊張感があまり途切れなかったのはいい効果をもたらしたと思われる。第二に、上級経済学院の研究者を中心として、ロシアからの参加者が増えた。現地の研究者が研究をリードするのは本来当然であり、歓迎すべきことである。ただし、ロシアからの参加者は、財政的な問題からキャンセルが多く、パネルがいくつか流れてしまったのは遺憾であった。第三に、ロシアの地方政治を扱ったパネルが多かったのは、1990 年代か

ら研究が盛んになったこの分野が、しっかりと定着したことを示しているように思われる。第四に、地域的には東欧地域を扱う報告があまり多くなかった。これまでのヨーロッパ開催とは異なり、日本での開催であることが影響したのかもしれないが、加えて、この地域の政治研究が、善かれ悪しかれ旧ソ連諸国の政治研究とかなり位相を異にしてきている反映なのかも知れない。

#### 歴史学 | 文責：池田嘉郎（東京大学）

歴史学は、各カテゴリー中で最多の90セッションがもたれた。内訳はパネルが78、ラウンドテーブルが12である。テーマは、経済史、政治史、軍事史、外交史、帝国史、文化史など、満遍なく扱われていた。時代についても同様で、中世史、帝政史、革命史、ソ連の各時代、ポスト・ソ連期についてうまく分散していた。内容は総じて水準が高く、かつ、研究動向の最先端を示すような論題がいくつも取り上げられていた。たとえば、20世紀初頭ロシア帝国の精神医学、冷戦期ソ連の対外経済関係、英雄および敵の表象、満洲のロシア人社会、ソ連の科学技術史、ハプスブルク帝国の地域史、ユーゴスラヴィアの 대중文化などを挙げるができる。また、とくに多かったテーマとしては、ロシア帝国の地方統治システム、第一次世界大戦およびロシア革命、ソ連の民族統治政策、日露関係などがあげられる。

他のカテゴリーと同様、日本の若手研究者の参加が目立ち、とくにパネル組織者として積極性を発揮した事例が多々見られた。英語での報告・執筆を前提とした、新しい世代が日本のロシア・東欧史研究において台頭していることがよく窺えた。

#### 境界研究・超域比較 | 文責：湯浅剛（広島市立大学）

境界研究・超域比較のカテゴリーに入るものは、パネル提案である7つ（20報告）、個人提案に基づいて学術委員会により組織された3パネル（10報告）、1ラウンドテーブル（報告者は2名）である。司会や討論者を含めた登壇者の出身国としては、ドイツの11名をはじめ、ロシア・フィンランド・英国（以上各5名）が目立ったほか、スロヴァキア・ポーランド・エストニア・ブルガリア・アラブ首長国連邦・カザフスタン（以上各1名）といった顔ぶれからも分かるように中東欧出身の研究者が並んだ。内容的にも「ドナウを超えた跨境的共生」（I-2-4）、「中東欧における越境協力と超域化」（I-4-4）といったパネル名に見られるように、中東欧を事例として扱ったものが多かった。なお、日本を拠点とする研究者の登壇は15名を数えた。そのうち、岩下明裕（北海道大）やA. ツィガンコフ（サンフランシスコ州立大）が報告したパネル「ロシア対外政策における空間とアイデンティティ」（IV-1-4）や地田徹朗（北海道大）が組織した「アラル海危機と（跨）境界問題」（IV-2-4）は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターが主導する「境界研究ユニット」の成果の一端を示すものとして興味深い内容となった。

#### 文学 | 文責：乗松亨平（同志社大学）

文学カテゴリーでは、計45のパネル（パネル提案23、個人提案にもとづくパネル22）と4つのラウンドテー



ブルが行われた。発表数は計 134 にのぼった。ドストエフスキーやナボコフ、ベールイといった古典的作家をテーマにしたパネルがそれぞれ複数組まれる一方、歴史学や社会学など、隣接諸分野との学際性を志向するパネルも目立った。とりわけ、旅や亡命・移民、翻訳など、国家や言語の境界を文学（者）がいかにか越えたかというテーマが数多くみられた。ロシア文学をめぐるパネルが主体ではあったものの、東欧や、さらに中央アジアやモンゴルの文学に関するパネルが組まれたことは画期的だった。「マイナー」な対象を専門とする研究者のネットワークを形成することは、国際学会の重要な目的であり、ICCEES の対象領域の広さと大会規模の大きさは、この目的に資するところ大であったと思われる。

#### 哲学 | 文責：乗松亨平（同志社大学）

哲学カテゴリーでは、計 7 のパネル（パネル提案 3、個人提案にもとづくパネル 4）が行われた。発表数は計 19 であった。比較的小さなカテゴリーではあるが、各パネル・発表のテーマは著しく多様であり、ロシアの宗教哲学といった伝統的テーマから、ソ連時代の哲学者たちのマルクス・レーニン主義への態度といった政治史に関わるもの、現代のロシア・東欧における価値観の衝突と融和といった時事的なものにまで及んだ。さらには、哲学という学問の特性上、「現代における人間の彷徨について」や「歴史の終わりについて」といった、ICCEES のカバーする地域性には捉われないような発表もあって、大会の射程を広げていた。どのパネルも少人数のかなり固定した聴衆のもと行われてはいたが、その分、カテゴリー内での人的交流は密なものになった。大規模学会と小規模な研究会の長所がともに発揮されたといえるだろう。

#### 言語学・言語教育 | 文責：野町素己（北海道大学）

言語学関係は 15 パネルおよび 2 ラウンドテーブル（計 39 報告）、言語教育関係は 5 パネルおよび 2 ラウンドテーブル（計 21 報告）であり、両分野合わせて全体に占める割合は 4.6% と低調に見える。しかしそれでも報告者の合計は、スラヴ語研究の国際学会と同水準かそれ以上であり、若手から大家まで様々な世代の研究者が参加しており、一定の成功を取めたと言える。両分野ともにロシア語を中心とするスラヴ諸語に関わるテーマが多く、従来の古典的な言語研究・言語教育論に加えて、文献学、文学、社会学、歴史学、政治学、文化人類学、心理学といった両分野に隣接する分野とを融合させる多種多様なアプローチも見られるなど、言語を軸とした学際的研究への関心も高まっていることが感じられた。今回は当該分野における東欧・旧ソ連諸国（ロシア以外）からの参加者が比較的少数であり、結果としてロシア関係の報告の割合に偏りを感じざるを得ないものとなったので、今後はより適当なバランスが求められる。また、地域研究に接点の無い言語研究者は ICCEES を知らないのも、当該分野の全体的なレベル向上のために、いかにこういった研究者を巻き込んでいくかが課題である。

#### 社会学 | 文責：岡奈津子（アジア経済研究所）

社会学カテゴリーでは 4 つのパネルと 1 つのラウンドテーブルが組織された。日本開催ならではのといえるのが、

北海道内外のアイヌを取り上げたラウンドテーブルであろう。パネルは応募段階からすべて個人提案であり、他のパネルとの統合や解体を経て上記の数まで絞られた。地理的にはロシア、ウズベキスタン、バルト諸国を対象とし、テーマも個人および集団の行動、住民の健康、宗教（イスラーム）など多様であった。

#### 経済学 | 文責：上垣彰（西南学院大学）

本大会において経済関係のパネルは、キャンセルとなったもの、他の分野のパネル（社会学関係）に統合されたものを除いて、20 パネル開催された。その他、一般向けの講演会（「制裁とビジネス」）およびブック・パネル（Shinichiro Tabata (ed.), *Eurasia's Regional Powers Compared - China, India, and Russia*, Routledge, 2015）がそれぞれ一つずつ開催された。20 のパネルの内容を適宜分類すると、「労働・人口」4、「経済成長・技術進歩」1、「天然資源」3、「国際経済関係」1、「マクロ経済」3、「企業・技術革新・近代化」5、「金融」2、「農業・土地」1となる。普通、経済関係の国際学会では、マクロ経済や国際経済に関する統計的・数理的分析が主流を占めるのだが、本大会では、むしろ、労働者や企業の現場に焦点を合わせた叙述的（descriptive）な研究が多かった（もちろん、すぐれた統計的・数理的な研究発表も少なくなかったが）。本大会全体の学際的雰囲気促されて、参加研究者の問題関心も純粋な経済学研究を超えた範囲に拡大していたのだと推測できる。また、ロシア・東欧地域のみの研究にとどまらず、それを中国や日本の歴史や現状と比較するような報告も多数あり、それが、活発な議論を誘発したことを強調しておきたい。ここにアジアで初めて開催された本大会の積極的意義があったように思える。

#### 人類学・民族学 | 文責：伊賀上菜穂（中央大学）

人類学・民族学カテゴリーに分類されたエントリーのうち、実際の大会で成立したのはパネル 11（このうち 5 パネルは組織委員会の作成）、ラウンドテーブル 1 であった。このカテゴリーが大会全体に占める比率は 3.09% だが、実際には民族紛争や民族政策、言語政策、宗教研究など、関連する内容で別ジャンルに分類されたものも多い。本分野に分類され、かつ成立したのを見ると、民族の伝統と文化を巡るアイデンティティ政治、移住などの人口移動に伴う異文化接触・異文化体験・共同体構築、エネルギー資源の採掘と牧畜民や移住者の生活の関係など、現代社会における諸問題を反映したものが多い。また日本の研究者を中心に組織されたロシア・スラヴ民俗学（フォークロア学）パネルの存在が際立つ。対象地域としては、ロシア各地と中央アジアが多く、その他、モンゴル、フィンランド、ベラルーシ、スロヴェニアなどがあった。

旧ソ連圏では伝統的な分野としての民族学・民俗学が一大勢力を築いているが、国際性と政治性、批判的精神が問われる ICCEES のような国際会議への参加者は少ない。その意味で、本会議で日本のロシア・スラヴ民俗学（フォークロア学）研究者が幅広い分野での報告を組織したことは、その層の厚さとチャレンジ精神をアピールするよい機会となった。これに対して、日本の文化人類学者のうち、非スラヴ系諸民族、つまりシベリア・極東・中央アジアの諸民族を研究している層の参加は不十分であった。これは ICCEES がロシアと東欧をメインとする地域研究であると認識されていることや、JCREES を通して募集活動が展開されたことと関係しているのだろう。

## 宗教研究 | 文責：伊賀上菜穂（中央大学）

宗教研究カテゴリーに分類されたエントリーのうち、実際の大会で成立したのはパネル4（このうち1パネルは組織委員会の作成）、ラウンドテーブル4（このうち2つが組織委員会の作成で、そのうちの1つは報告者1名だけ）であった。またこれとは別に、組織委員会で作成した報告者1名ラウンドテーブル（4376）が、報告者欠席で当日キャンセルとなっている。

このカテゴリーが大会全体に占める比率は3.23%だが、人類学や歴史学、哲学に分類されたものも多い。

本パネルに分類されかつ成立したのを見ると、ロシア正教とイスラームに関する報告が多いが、特にロシア正教と国家との関係に注目したものが目立つ。イスラームについては、ローカルなムスリム共同体に着目したものが多かったが、これはおそらく紛争関連のトピックがコンフリクト研究などに分類された結果であろう。宗教関係で歴史に分類されたものも含めると、今回の大会では日本や中国における正教やイスラームに関する報告が多かったことが、一つの成果として挙げられよう。一方で、シャーマニズムや自然崇拜など、日本人が比較的得意とする民族宗教に関する報告が少なかったのは残念である。

## 芸術・映画・メディア | 文責：亀田真澄（東京大学）

「芸術・映画・電子メディア」のカテゴリーでは、計22のパネル（パネル提案11、個人提案にもとづくパネル11）と2つのラウンドテーブルが行われた。それぞれのパネル数は、芸術13、映画5、電子メディア4である。芸術の分野では、クラシック音楽やバレエといった伝統的なジャンルを扱うパネルから、音響複製技術が音楽に与えた影響、ポスト共産圏のノスタルジーなど、多様なテーマについて議論された。映画の分野では、ロシア映画研究を中心に、観光産業におけるビデオの使用や、発表者自らが撮影した映画の上映も行われた。電子メディアの分野では、冷戦期のテレビ研究からTwitterなど現在のソーシャル・ネットワーキング・サービスを扱うパネルまで、政治とメディアの関係を扱う報告が多かった。本分野のパネルおよびラウンドテーブルは、比較的小規模な集まりとなるが多かったが、それゆえに議論への参加へのハードルが低かったことが特徴的である。歴史や政治の領域と密接にかかわるパネルでは、それぞれの分野の専門家が積極的に質問を提起しており、分野を越えた学術交流の機会となったと思われる。また、伝統的な芸術研究の枠組みにおいても、異なるフィールドを対象とする研究者との活発な議論が行われた。

## 国際関係 | 文責：松里公孝（東京大学）

幕張世界大会は、ウクライナ危機の真只中でプロポーザルが集められ、開催された。そのため15のパネル・ラウンドテーブルがウクライナ危機を扱ったものとなった（ここには、ウクライナの内政一般、歴史、民族学などを扱ったものは含まない）。世界の注目を集める問題が大きなウェイトを占めたこと自体が重要であり、マスコミからの参加者もウクライナ危機のパネルに出席する機会が多かったようである。

内容的には、ロシア悪玉論が圧倒的な欧米で開催される場合と違って、様々な見方が表明されたところに日本

開催の意義があったと思われる。北米からの参加者でありながらユーロマイダン革命に批判的な見解を述べる研究者もいて、激しい議論になった。経済的な事情のため、ウクライナからの参加が少なかったことが悔やまれる。

本部企画としても「彼らにオールタナティヴはあったか」が組織された。この企画は、クリミアとドネツクから政治学者を招聘するという難しい課題を伴ったが、日本外務省の理解を得て成功した。組織者（松里）は、2008年の第2次オセチア戦争の後、同事件を扱う様々な国際学会に出たが、最大当事者である南オセチアから研究者を招いたものはひとつもなかった。これは、第一には、非承認地域の研究者には外国ヴィザをとることが極端に難しいためであり、第二には、「南オセチア、アブハジア、クリミア、ドンバスなどはロシアの傀儡なのだから、本人たちに喋らせる必要はない。ロシア人を招けば十分」という謬見が世界で支配的なためである。

パネルとラウンド・テーブルの合計数が22で、ウクライナ危機関連よりも多かったのは、中央アジアの安全保障やユーラシア統合を扱ったものだった。これこそまさに、世界大会がアジアで開催された意義である。その反面、ユーゴ紛争、非承認国家、コーカサスのテロなどを扱ったパネルは少なく、欧米で開催される学会とは異なるものとなった。

### 組織委員会による特別企画（公開シンポジウム2を含む）



8月7日、国際シンポジウム「スラヴ文学は国境を越えて」



8月3日、元首相サミット

#### 8月3日（月）

【オープニング企画】 15:30～17:00（幕張メッセ）

「元首相サミット——中国、ロシア、韓国、日本の元首相が中国台頭を論ずる」 ※同時通訳付き

パネリスト：福田康夫（日本）、<sup>ハンスンジュ</sup>韓昇洲（韓国）、セルゲイ・ステパーシン（ロシア）

司会：下斗米伸夫（法政大学教授）、安達祐子（上智大学准教授）

#### 8月5日（水）

【特別シンポジウム】 18:30～20:00（神田外語大）

「変化する世界のユーラシア——東西関係の中の北極海と極東」

パネリスト：ウルフ・スヴェルドルプ（ノルウェー国際関係研究所）、フョードル・ルキヤノフ（ロシア対外・防衛政策評議会）、ヤン・チェン（華東師範大学）、ケント・カルダー（ジョンズ・ホプキンス大学）

司会：田中伸男（笹川平和財団）

\*協力 日本国際問題研究所

**【国際シンポジウム】** 18:30～20:00 (神田外語大)

「ロシア革命研究の最前線——100周年に向けて」

パネリスト：ウラジーミル・ブルダコフ (ロシア科学アカデミー歴史研究所)、ボリス・コロニツキー (ペテルブルク・ヨーロッパ大学)、メリッサ・ストックデイル (オクラホマ大学)、和田春樹 (東京大学名誉教授)

司会：池田嘉郎 (東京大学)

8月6日 (木)

**【特別シンポジウム】** 18:30～20:00 (神田外語大)

「現地から見るウクライナ動乱」

パネリスト：セルゲイ・クデリヤ (ベイラー大学)、ウラジーミル・ジャララ (クリミア議会)、キリル・チェルカーシン (ドネツク大学)

司会：松里公孝 (東京大学)

\*助成 科研費基盤研究 (B) 15H03309

**【パネル・ディスカッション】** 18:30～20:00 (神田外語大)

「東アジアにおけるロシア文学研究・翻訳の現状と未来」

パネリスト：望月哲男 (北海道大学)、リュウ・ウェンフェイ (中国社会科学院)、キム・ジンヨン (延世大学)

司会：野中進 (埼玉大学)

\*助成 科研費基盤研究 (A) 25243002

8月7日 (金)

**【国際シンポジウム】** (一般無料公開) 18:30～20:00 (神田外語大)

「スラヴ文学は国境を越えて—ロシア、ウクライナ、ヨーロッパと日本」※逐次通訳付き

パネリスト：ミハイル・シーシキン (ロシア、作家)、アンドレイ・クルコフ (ウクライナ、作家)、ドゥヴラフカ・ウグレシッチ (クロアチア、作家)、多和田葉子 (作家)

司会：沼野恭子 (東京外国語大学)

\*助成 国際交流基金、後援 日本ペンクラブ

**【特別シンポジウム】** (一般無料公開) 18:30～20:00 (神田外語大)

「制裁とビジネス」※日本語、通訳なし

パネリスト：青山伸昭 (新日鉄住金エンジニアリング)、朝妻幸雄 (日ロ交流協会)、上垣彰 (西南学院大学)、岡田邦生 (ロシア NIS 貿易会)、マクサット・サリエフ (カザフスタン大使館参事官)、本村真澄 (石油天然ガス・金属鉱物資源機構)

司会：田中哲二 (中央アジア・コーカサス研究所所長)

\*協力 ロシア NIS 貿易会

## 総括——プログラムの作成と修正

松里公孝（第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会国際プログラム委員長）

本大会のプログラム編成・修正は四つの段階からなった。①参加希望者がパネル、ラウンドテーブル、個人報告を提案する（2013年11月から2014年6月15日まで）。②個人提案については、類似したものを3本集め司会と討論者を依頼し、パネルにする。できたものを参加者自身によって提案された通常のパネル・ラウンドテーブルとあわせ、時間割上に割り振る（2014年6月15日から8月3日まで）。③プログラムの発表後、参加登録料を徴収する（2014年10月から2015年7月7日まで）。④大会期間中、登録料未払いの参加者には払ってもらい、全参加者にチェックインしてもらおう。いずれの段階もオンライン・システムが大きな役割を果たす。その意味で、2013年7月の入札の結果、リンケージという優れたシステム管理会社が世界大会に寄与してくれたことは僥倖であった。

上記の②まで終えた者が約1750名、③まで終えた者が1337名、④に至った者（実際に参加した者）が1209名である。この他、登録手続きを経ないゲスト、報道関係者などが約100名参加したので、幕張世界大会の参加者数は1310名となった。③と④の間の人数差は、参加登録料を払ったにもかかわらず実際には参加しなかった者が100名以上いたことを示している。参加登録料の払い戻しは、2015年2月末日までに辞退の意思表示をした者のみに行った。

これまでのICCEES世界大会では、アカウントを作った者と実際に参加した者の間には400人くらいの差ができると言われていた。幕張の場合は550名の差があるから、従来より規律が低い大会であったといわざるを得ない。第一の理由は、ウクライナ内戦とロシアへの制裁による財政状況・経済状況の悪化のため、ウクライナ、ロシア、カザフスタンからの参加予定者の多くがキャンセルしたことである。たとえばロシアからは最大時は350名の参加予定者があったが、実際に参加したのは166名であった。第二に、幕張世界大会はアジアや旧共産圏の新規の参加者を開拓したが、これらの中には、「学会参加キャンセルはよくないこと」という職業意識が普及していない国が少なくないということである。言い換えれば、これらの国に粘り強く働きかけ続けることで、職業意識を高めることができる。幕張大会はその第一歩であった。

プロポーザル募集については、オンライン提案を原則としつつも、オンラインが苦手な参加希望者のために、組織委員会はMSワードのメール添付による提案も認め、システムへの入力代行業務を提供した。

幕張が新規に開拓したアジアや旧共産圏からの参加希望者は、パネル提案という欧米的な形式になれていないため、報告数で計算すると、4割以上が個人提案であった。これらを3件ずつ束ねてパネルにする必要があったのだが、これには専門性が要求されるので、組織委員会からディシプリンごとにパネル・イニシエーターが選ばれ、この作業に従事した。つまり、パネルのうち相当部分は、組織委員会が作ったパネルであった。

多数の組織委員会製パネルの存在は、「一回作ったから好し」というものではなく、次第に組織委員会にとって重荷になっていった。参加者自身が作ったパネルならば、パネリスト同士が監視し合い、励まし合うので壊れにくい。辞退者が出たら、パネル・オーガナイザーが自分の責任で代役をみつける（見つけることができずに不完全パネルになったら、それも自己責任である）。しかし、組織委員会が作ったパネルは壊れやすく、辞退者が出たり壊れたりした場合には、組織委員会が補充再編してあげなければならないのである。直前まで司会や討論者が決まっていない組織委員会製パネルもあった。大会直前になり、組織委員会が会場・総務系

の仕事に忙殺されるまさにその時期に、多くの組織委員会製パネルが壊れた。また、パネル自体は壊れなかった場合でも、組織委員会製パネルのパネリストはお互いを知らないので、パネリストのメールアドレスを連絡したり、ペーパーの提出を促したりするような援助活動を行わなければならなかった。自力でパネルが作れない人たちのためにここまでしてあげなければならないのか、将来の世界大会組織委員会にとっても検討課題であろう。最も原則的な解決は、ASEEESの年次大会のように、個人提案を基本的に認めないルールにすることである。しかしそうすると、アジアや旧共産圏からの参加者はかなり減るだろう。

2014年10月に第1次プログラムが発表され、クレジットカードか銀行振り込みによる参加登録料の徴収が始まった。2014年末日までに払い込めば早期登録の割引が享受できたので、763名が2014年中に入金した。しかし、年を越えると入金鈍化し、事前登録の締切日である7月7日までに437人しか登録しなかった。つまり、計1200人の登録をもって事前登録は終了し、あとは大会当日の伸びに期待するしかなくなったのである（結果的には、現地登録者69名、1日券購入者65名）。登録の鈍化とあわせ、2015年に入ると参加辞退が目立つようになってきた。登録の進行度合から、相当数の参加予定者が実際には参加意欲を失っているのは明らかであったため、5月くらいから、「参加辞退するのはなんら問題ではない。しかし無断で参加辞退するのはやめてくれ」という趣旨の一斉メールを、登録料未払い者自身や未払い者がいるパネルのオーガナイザーに繰り返し送った。この一斉メールはそれなりの効果があり、プログラムと実態の齟齬は少なくなった。言い換えれば、会場に行ってみるとパネリストが誰も来ていないという従来のICCEES世界大会の「風物詩」は少なく済んだ。

本番に入ると、リンケージ社が開発したチェックインのシステムが大きな効果を持った。ある参加予定者がチェックインしていないということは、会場に現れていないということである。これが内部用プログラムに表示されるため、どのパネルが危機パネルかすぐわかる。したがって、各スロットに約25のパネルがあるとしても、スロットの開始時に点検しに行かなければならない（危機が的中していれば、聴衆にお詫びして流さなければならない）のは、数パネルに限定された。一般的な見回りをしなくてもよかったのである。大会期間中に、現場で流れたパネルは7しかなく、プログラムと実態の乖離は事前に相当克服されていたと言える。

以上がプログラムの本体部分を構成したが、このほか、午後6時半から8時までの時間帯に行われたイブニング特別企画、昼食時と夕方の休憩時（午後1時から30分、午後6時から30分）を使って行われた22のブックパネル（書評会）が世界大会をさらに豊かなものにした。

## 6. 大会運営

### 受付

場所と時間

● 8月3日

受付時間：10：00—18：00

場所：幕張メッセ国際会議場 2階コンベンションホール前

● 8月4～8日

受付時間：9：00 - 17：00 ※8日のみ16：30まで

場所：神田外語大学 4号館 1階 入り口ホール

支払いが必要な参加者用の「Unpaid」デスク、支払い済み参加者用のデスク（参加者の姓のアルファベット順）、その他デスク（プレス・企業研修・過不足処理・茶道前売り券）の3種類に分け、会場前にデスクとベルトパーテーションを配置し、リンケージ社スタッフと研究者ボランティアで受付対応を行った。登録受け付けを済ませた参加者には、冊子プログラムの入ったコンGRESバッグとネームカードシートを配布した。

混雑を避けるために、受付の時間の幅を増やすなど、事前に対応していたため、長い行列ができるなどの問題は起こらなかった。

チェックイン情報は、オンラインデータに随時反映され、どの参加者が会場入りしたかを管理していたため、パネルの成立可否の予測を立てることが容易となった。

- ・ネームカードは右のような4枚綴（ネームカード、参加証明書、領収書、組織委員会用の控え）になったものを制作。
- ・デザインは加藤賢策氏
- ・コンGRESバック内容物：冊子プログラム、正誤表、ブックスタンド・見取り図、ボールペン、メモパッド、ネームカードホルダー、ネックストラップ、千葉市長メッセージカード、クリアファイル（千葉市提供）、千葉市ガイドマップ、EAST VIEW（出版社）アンケート用紙、Routledge（出版社）広告、Natasha Kozmenko（出版社）広告、Osteuropa（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター出版物）、イトーヨーカ堂広告、イオン広告、セブン銀行広告・ATM利用案内、三井アウトレットパーク広告



ネームカード 印刷：勝美印刷

### 暑さ対策

◆ 大会開催期間は8月の猛暑期にあたり、特にロシアや欧米地域の比較的気候の涼しい地域から来る参加者の体調への影響が懸念された。このため、以下の対策を講じた。



- (1) レンタルのウォーターサーバーを3箇所に設置（4号館入口、6号館2F、7号館2F）
- (2) ペットボトルの水の無料配布（サントリーホールディングス株式会社より提供 550ml 24本入り 84ケース）

◆ 連日の猛暑が会場校の建物の冷房能力で対応できる範囲を超えていたためか、冷房が効かなくなる教室が初日から続出して苦情が出た（おもに4号館208、308、309、310、7号館701、702）。最高気温が連日33度から38度にもなる猛暑の中で、冷房が効かない教室で学会を続けることは不可能である。そのため大学側と相談のうえ、急遽、本来使用予定にはなかった他の建物の部屋（3号館103、104など）にセッションを移した。教室変更は掲示板・張り紙による周知を徹底したため、深刻な混乱には至らなかった。

◆ 8月6日、熱中症とみられる症状で、幕張本郷駅より救急搬送された外国人参加者が1名いたが、重症ではなく、数時間後には回復した。

【参考】2015年8月3日～8日の千葉県千葉市の気象情報

	降水量 (mm)			気温 (°C)			湿度 (%)	
	合計	最大		平均	最高	最低	平均	最小
		1時間	10分間					
3	--	--	--	30.0	34.1	27.2	72	50
4	--	--	--	29.9	35.2	27.2	71	47
5	--	--	--	30.3	34.0	27.7	71	51
6	--	--	--	30.2	33.6	27.8	72	59
7	--	--	--	31.1	38.5	27.5	67	37
8	--	--	--	27.2	32.7	24.4	73	50

出典：気象庁「千葉 2015年8月（日ごとの値）主な要素」

[http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily\\_s1.php?prec\\_no=45&block\\_no=47682&year=2015&month=8&day=8&view=](http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily_s1.php?prec_no=45&block_no=47682&year=2015&month=8&day=8&view=)

◆ 大会期間中を通じて、ほぼ連日猛暑日・熱帯夜またはそれに近い気温が続き、8月7日は千葉での観測史上最高の38.5度という最高気温を記録した。なおこの時期、東京では7月31日から8月7日にかけて猛暑日が8日連続し、これもまた観測史上最長記録となった。

## 救護体制

- ・ 8月4～6日 神田外語大学メディカルセンターで対応
- ・ 8月7～8日 休日につき、救護室（4-106教室）を設置
- ・ 各建物1階に1台ずつ配置されている車椅子を必要に応じて利用
- ・ 会期中に、階段で転倒した負傷者1名、また血圧上昇のため救護室で休んだ参加者が1名いたが、その他、熱中症などの症状を訴える参加者は幸い、会場ではいなかった。

## ボランティア

大会期間中を通じて、以下の3種類のカテゴリーのボランティアが酷暑にも負けずに活躍し、運営のために決定的に重要な役割を果たした。外国から来た大会参加者の間でも評判は極めて高かった。

ボランティア数

	参加人数	延べ人数
研究者ボランティア	48	214
語学ボランティア	50	82
学生ボランティア	35	71
合計	133	367



「何語でも大丈夫です！」ベラルーシ、ポーランド、日本、カザフスタン、中国……国際色豊かな研究者ボランティアたち。大会公式Tシャツ（加藤賢策氏デザイン）を着て颯爽と。

\*注

・研究者ボランティア：組織委員会が募集し、統括・指揮した全国の大学の若手研究者・大学院生。大部分が英語・ロシア語の二か国語に堪能。さらにカザフ語、ベラルーシ語、ポーランド語、中国語などの話者もいた。大会運営全般の中核をなした（一部は受付を担当）。

・語学ボランティア：千葉市・ちば国際コンベンションビューローが募集し、同ビューローが統括・指揮した一般市民。インフォメーションデスク、駅、バス停で、英語による情報提供を行った。

・学生ボランティア：神田外語大学が募集し、組織委員会が統括・指揮した同大学学部生。「国際会議運営ボランティア」として学内を英語で案内をし、運営の補佐的な役割を

果たした。

・ボランティアといってもまったくの無償奉仕ではなく、すべてのボランティアにつき、一定の謝金・交通費などを組織委員会が負担している。

### ボランティア参加証明書

組織委員会は、若い学生たちにとってこのような国際会議におけるボランティア活動が、単なるアルバイトではなく、学業・将来のキャリアにとって有益な経験となるよう教育的配慮を心掛けた。終了後は、神田外語大学の学生ボランティア全員に、「国際会議運営ボランティア参加証明書」を発行、学生ボランティアの貢献に感謝と敬意を表した。配布は事後、神田外語大学ボランティアセンターに依頼した。



## 研究者ボランティア一覧 (50音順)

阿部怜絵 (東京大学・学部)  
石井美智也 (東京外国語大学・学部)  
石井優貴 (東京大学・修士課程)  
市川愛実 (東京外国語大学・修士課程)  
内川晶子 (早稲田大学・修士課程)  
ウッセン・ボタゴズ (東京大学・博士課程)  
大久保圭 (東京大学・修士課程)  
大崎果歩 (東京大学・修士課程)  
銚川貴久 (東京大学・修士課程)  
木原慎子 (東京大学・修士課程)  
木村香織 (Magyar Tudományok Akademia・研究員)  
草柳貴恵 (一橋大学・修士課程)  
工藤順 (東京外国語大学・学部)  
小林昭菜 (法政大学・博士課程)  
小宮山宗 (神戸大学・修士課程)  
笹山啓 (東京外国語大学・博士課程)  
柴田賢 (早稲田大学・学部)  
シフィルコスキ・アンジェイ (アダム・ミツキエヴィチ大学・博士課程)  
ズーエフ・コンスタンチン (東京外国語大学・修士課程)  
菅原彩 (早稲田大学・博士課程)  
鈴木佑也 (横浜国立大学・非常勤講師)  
五月女颯 (東京大学・修士課程)  
田中沙季 (早稲田大学・博士課程)  
田中壮泰 (東京大学・学術振興会特別研究員 PD)  
田中祐真 (東京大学・博士課程)  
張忱 (オハイオ大学・博士課程)  
机文明 (法政大学・研究員)  
泊野竜一 (早稲田大学・博士課程)  
豊田宏 (東京大学・修士課程)  
鳥飼将雅 (東京大学・修士課程)  
長江聡 (東京外国語大学・学部)  
長與茅 (オックスフォード大学・修士課程)  
ナザランカ・カチャリーナ (東京外国語大学・修士課程)  
西菜津子 (東京大学・博士課程)  
林愛子 (早稲田大学・修士課程)  
林由貴 (東京大学・博士課程)  
東和穂 (東京大学・博士課程)

樋口稲子（早稲田大学・博士課程）  
福井祐生（東京大学・修士課程）  
古川哲（聖心女子大学・非常勤講師）  
松本隆志（早稲田大学・助手）  
マフミドフ・ウミド（法政大学・博士課程）  
三浦領哉（早稲田・博士課程）  
初内裕子（早稲田大学・非常勤講師）  
安野直（早稲田大学・修士課程）  
山岡諒子（早稲田大学・学部）  
ヤーサマン・ソルホディーニー（東京大学・研究生）  
ルチュク・レフコ（東京外国語大学・大学院研究生）

## 7. 準備活動

### 組織委員会会議

幕張での世界大会誘致決定以来、組織委員会は大会開催のための重要事項を相談するべく、定期的に会議を開いてきた。会議には CCB、千葉市、リンケージ社の担当者が必要に応じてオブザーバーとして参加していただいた。また大会直前の 2015 年 7 月 24 日には神田外語大学に会議室を提供いただき、酒井学長を初めとした大学関係者にもご参加いただき、神田外語大学との緊密な連携のうちに大会を円滑に実施するための打ち合わせを行った。

#### 会議記録

日時	場所
2011 年 12 月 27 日 (火)	ちば国際コンベンションビューロー研修室
2012 年 7 月 27 日 (金)	法政大学ボアソナードタワー 25 階 C 会議室
2012 年 12 月 27 日 (木)	ちば国際コンベンションビューロー研修室
2013 年 6 月 17 日 (月)	東京大学本郷キャンパス 山上会館 会議室 001
2013 年 12 月 25 日 (水)	法政大学ボアソナードタワー 22 階 現代法研究所
2014 年 5 月 6 日 (火)	青山学院大学総研ビル 10 号館
2014 年 7 月 5 日 (土)	東京大学文学部 3 号館 8 階現代文芸論研究室
2014 年 7 月 19 日 (土)	東京大学文学部 3 号館 7 階スラヴ語スラヴ文学研究室演習室
2014 年 8 月 3 日 (日)	東京大学文学部 3 号館 7 階スラヴ語スラヴ文学研究室演習室
2014 年 9 月 1 日 (月)	青山学院大学 8 号館 4 階 国際研究センター会議室
2014 年 10 月 7 日 (火)	東京大学文学部 3 号館 7 階スラヴ語スラヴ文学演習室
2014 年 12 月 26 日	東京大学法文 2 号館中 2 階教員談話室
2015 年 4 月 4 日 (土)	東京大学文学部 3 号館 7 階スラヴ語スラヴ文学演習室
2015 年 5 月 9 日 (日)	東京大学文学部 3 号館 7 階スラヴ語スラヴ文学演習室
2015 年 6 月 7 日 (日)	東京大学文学部 3 号館 7 階スラヴ語スラヴ文学演習室
2015 年 7 月 4 日 (土)	東京大学文学部 3 号館 7 階スラヴ語スラヴ文学演習室
2015 年 7 月 24 日 (金)	神田外語大学大会議室

\*大会終了後の会議： 2015 年 10 月 3 日 (土) には如水会館 (東京・一ツ橋) で総括会議が開催され、組織委員、研究者ボランティア、田中顧問会議代表幹事の他、ちば国際コンベンションビューロー、JTB1 名、コンベンション・リンケージ社から関係者が出席し、実施報告と事後処理方針についての審議が行われた。

## 事務局運営

- ◆ 2014年7月、東京大学文学部現代文芸論研究室に事務局が設立され、以後、大会準備のためのあらゆる事務関係作業（HP運営、メール・電話対応、郵送物の発送、プログラム制作等、各種必要な文具、機材の発注等）が、ここを拠点に行なわれた。
- ◆ 運営体制は、同研究室助教・亀田真澄が事務局次長に就任し、島袋里美がHP担当、北井聡子が事務局補佐となった。また現代文芸論研究室主任の沼野充義（組織委員長）が業務全般の責任者となった。
- ◆ 2014年12月 東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室（主任教授・三谷恵子）が、研究室内の一部屋を事務局作業スペースとして提供する。
- ◆ 情報の共有・連絡ツールとして2つのMLを活用した。一つは組織委員会内部用のものであり、もう一つは組織委員と外部の各協力団体の担当者（リンケージ社、ちばコンベンションビューロー、千葉市集客観光課）を加えたもの。この2つのMLを利用し、準備期間から大会終了後の事後処理の全期間を通じて、連日活発な議論が交わされ、大会直前には日に70～80通を超えるメールが飛び交うことも珍しくなかった。
- ◆ 幕張世界大会のFacebookは2013年6月に開設され、常に最新の情報発信を行ってきた。特に2015年8月2日～8月9日まで「イクシーズ幕張タイムズ」として、毎日英語で情報発信を行った。多くの写真とともに大会の出来事を報道し好評を得た。

## 8. 関連行事

### 「ユーラシア世界を知るための市民教養講座」

共同主催者である日本学術会議は、このような国際学会を行う際に、学術的成果を一般市民に還元することを重要視している。組織委員会はこの方針に応え、以下のような連続市民講座を開催した。講師はすべてそれぞれの分野の第一線の研究者で、組織委員会の依頼に応じてボランティアとして協力していただいた。聴講者は各回 30 人～70 名程度、全 9 回の延べ聴講者数は、千葉市民を中心にして 450 人以上にのぼる。幸い、市民の多くからも、また関係諸団体からも感謝され、好評であった。聴講者の多くは非常に熱心で、講師も強い手ごたえを感じた。受講者を対象に実施したアンケートからも（とりまとめ結果は以下に掲載）、おおむね好評であったと自己評価できる。

場所 千葉商工会議所研修室（千葉県千葉市中央区）

シリーズ 1 全 4 回 5 月 20 日～6 月 10 日 講師全 4 名

シリーズ 2 全 5 回 6 月 13 日～7 月 25 日 講師全 11 名

共催 日本ロシア・東欧研究連絡協議会（JCREES）

国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）幕張世界大会組織委員会

協力 千葉商工会議所（会場提供）

入場無料 当日先着順

### プログラム

【シリーズ 1】今後のユーラシア動向（全 4 回）		
コーディネーター：下斗米伸夫（法政大学教授） 日時 5/20(水)、5/27(水)、6/3(水)、6/10(水) 18:30～20:30		
日	テーマ	講師
5/20(水)	ウクライナ動乱後のユーラシア—秩序回復は可能か？	松里公孝（東京大学教授）
5/27(水)	ユーラシア取材 30 年—旧ソ連の激動と日ロ関係を追いかけて	大野正美（朝日新聞社機動特派員）
6/3(水)	ウクライナ危機とロシア経済の展望—ロシア・EU 関係の変化とロシアの東方シフト	蓮見雄（立正大学教授）
6/10(水)	新興国カザフスタンの光と影—贈収賄の蔓延と人々の暮らし	岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員）

【シリーズ2】ロシア東欧の文化と芸術（全5回）		
コーディネーター・司会：沼野充義（東京大学教授）＋野中進（埼玉大学教授） 日時：6/13(土)、6/20(土)、6/27(土)、7/18(土)、7/25(土) 14時～16時30分 ただし7/25のみ14時～17時		
日	テーマ	講師
6/13(土)	文学のヴィジョン、音楽のエクスタシー — ロシア小説と音楽への誘い	望月 哲男(北海道大学特任教授・ロシア文学会会長) 亀山 郁夫(名古屋外国語大学学長) 司会：沼野 充義
6/20(土)	目と耳の快楽 — ロシアの美術と詩歌	鴻野わか菜(千葉大学准教授) 坂庭 淳史(早稲田大学准教授) 司会：野中 進
6/27(土)	踊るロシア、観るロシア — バレエと映画	村山 久美子(舞踊史・舞踊評論家) 佐藤 千登勢(法政大学准教授) 司会：野中 進
7/18(土)	暮らしと食へのまなざし — ロシアの歴史と食文化	池田 嘉郎(東京大学准教授) 沼野 恭子(東京外国語大学教授)
7/25(土)	【シンポジウム】 スラヴ文化の広がり — ウクライナ・ポーランド・旧ユーゴスラヴィア	V・スロヴェイ(翻訳家・通訳) 松尾 梨沙(東大大学院博士課程) 亀田 真澄(東京大学助教) 司会：沼野 充義

\* 6月13日、7月25日は、科研費研究基盤(A) <越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて> (研究課題番号：25243002、代表者 沼野充義) との共催企画

## 日本文化体験（お茶会）

2015年8月6日

神田外語大学キャンパス内の茶室「八風居」

講師：田中宗和（和子）先生と睦会

セッション：20名×5回 計100名

実際の参加者：96名（すべて外国人）

会費：実費（茶・菓子代）：500円

\*会場は神田外語大学のご厚意により、無償で提供していただいた。毎回ほぼ満席で、外国人参加者に大変好評であった。





## ICCEES 関連国際学会会議など

### ◆ ICCEES

執行委員会、国際委員会が幕張大会会期中に神田外語大学の教室を借りて開催され、次期 ICCEES 執行部人事が決まった。国際委員会はスカイプを使ったアメリカ学会の代表も参加する予定だったが、うまく機能せず、断念した。スカイプを用いた国際会議の実施に向けては、今後日本の大学・会議場などの設備を充実させる必要がある。

新会長に Georges Mink, 新副会長に Andrii Krawchuk, 新事務局長に Gabriele Freitag が選出された。また、日本から松里公孝 (東京大学法学部) に代わって池田嘉郎 (東京大学文学部) が新たに執行委員会に入ることが承認された。

次回大会が 5 年後にカナダ (モントリオール) で開催されることが正式に決定された。

### ◆ 東アジア・スラヴ研究学会サミット

The 8th Summit of Slavic-Eurasian Studies Associations of East Asia が、JCREES 代表幹事沼野充義の主催により、幕張大会会期中の 8 月 5 日に、ホテル・スプリングズ幕張日本食レストラン玄海で、昼食会を兼ねて開催され、中国・韓国・モンゴル・カザフスタン・日本の各スラヴ学会組織代表者のほか、ICCEES よりオブザーバーとして新旧執行部計 5 名が出席し、歓談した。この場で、来年度東アジア・スラヴ研究大会は上海で開催することが確認された。日本側からの出席者は、沼野充義、池田嘉郎、松里公孝、亀田真澄 (記録担当) であった。

## 「まち歩きガイド」

主催 千葉商工会議所

日時 8 月 6 日 (木) 12 時～ 15 時

対象 外国人研究者 6 名

趣旨 大会に参加するために来日した外国人研究者を対象に、千葉市中心部を歩いて商店や料理店を訪問することにより、千葉市の良さを知っていただく企画。千葉商工会議所の依頼を受け、組織委員会は当該日時に学会活動などの支障がない 6 名の外国人研究者を選んで参加していただいた。

## 9. フィードバック

大会終了後、組織委員会の要請に応じて ICCEES やその他の学会長などから幕張大会についての感想・コメントなどが寄せられた。また参加者全員への一斉メールと Facebook でも感想を求めた。以下その一部を転載する。

### ICCEES 元会長 Graeme Gill シドニー大学教授より (翻訳・抜粋)

…最高の大会を組織して下さい、ありがとうございます。殆どのパネルの水準は非常に高く、知的な刺激にあふれたものでした。組織委員会の大会運営は、賛辞を送られるべきものです。今まで私が参加した中でも最も良く組織された学会の一つでありましたし、また全ての人が友好的かつ親切であったことが、大会をこれほどまでに楽しいものにした主要な要因でしょう。私個人としても、また ICCEES の前会長としても、組織員会全員とその努力に祝辞を送りたいと思います。この地域 (アジア) での ICCEES のさらなる発展のための、最高のスタートを切ったと思います。

### ICCEES 新会長 Georges Mink パリ大学教授より (翻訳・抜粋)

…全ての組織員会の皆様、日本の学者、そして学生の尽力のおかげで大会は素晴らしいものとなりました。私が知る限り、最も内容が豊かで多様な学会でした。このことは EC (執行委員会) と IC (国際委員会) の全ての同僚達のあいだで共通する意見であると確信しています。このような巨大会の運営というのは非常に困難なものです。全ての特別企画、パネルの高い学術的水準、そして並外れたスタッフの献身的活動により、私たちは大きな満足を得られました。

### モンゴルスラヴ学会代表 Altai Dulbaa 教授より (翻訳・抜粋)

第9回 ICCEES 世界大会の開催期間中のホスピタリティに感謝いたします。また組織委員会メンバー、その他日本の学者やボランティアの素晴らしい働きにお礼を申し上げます。

### ICCEES 新事務局長 Gabriele Freitag 博士より (翻訳・抜粋)

…大会をとて楽しむことができました。日本で開催されたことで、トピックのテーマがよりアジアに関連した問題へとシフトされていたと思います。極東や中央アジア、日露関係に特化した非常に興味深いパネルに出席することができました。大会運営は完璧であり、皆さんが非常に親切に歓迎してくれました。(…) サンドウィッチなど軽食の選択肢がもっとあれば良かったかと思います。しかし伝統的な美味しい日本食ともてなしを私たちは堪能することができました。

### 中国スラヴ学会 CAERCAS 会長 Li Jieng Jiei 氏より (翻訳・抜粋)

…第9回 ICCEES 幕張世界大会のような巨大規模の国際学会を素晴らしく組織された日本の友人たちに敬意を表します。

### 韓国スラヴ学会代表 Seongjin Kim 教授より (翻訳・抜粋)

大会全期間を通じての温かい歓迎と準備に対して、沼野充義教授、並びに組織委員会の皆様に敬意を表します。猛暑の中で働いた学生たちにとりわけ感謝申し上げます。

### ICCEES 副会長 Andrii Krawchuk 教授より (翻訳・抜粋)

大会運営全般について：全てよくオーガナイズされていた。参加募集、プロポーザル、参加登録、トラベルインフォメーション、e-mail 対応、情報のアップデート等、ウェブサイト運営もスムーズだった。パネル・セッションは定刻どおり指定された場所で行われた。飲料水も十分に用意されていた。

プログラムについて：テーマごとに統一され、論理的に進行していたために、一箇所で同じテーマのセッションを聴くことができた。冊子・オンラインプログラムは見やすく、使いやすいものだった。とりわけ、特別プログラム、オープニングセッションは大会全体の価値を高めるものだった。

場所と施設について：部屋のサイズは各セッションに適したものだった。エアコンが効いているエリアは過ごしやすかった。設備のその他の技術的問題は何もなかった。掲示も適切で分かりやすく、セッション間の移動に困ることはなかった。

食事について：美味しく質の高いものだった。最終日のレセプションでは一度に人が押し寄せ、会場入りが多少の混乱したものの、10 – 15 分後には状況は落ち着いた。

ボランティアについて：若い人々の貢献については賞賛の言葉以外ありません。気遣い、元気のよさ、献身的、必要な情報を提供してくれた。また几帳面でプロ意識をもっていた。彼らの存在が参加者をリラックスさせ、歓迎ムードを作ってくれた。

交通手段について：初日と次の日で、ホテルのバスの出発場所が変わったので、参加者のあいだで多少混乱が生じていた。また二日目、バスが遅れたのでタクシーに乗らざるを得なかった。残りの日程はすべて時間通りにバスが来た。

### その他一般の参加者から寄せられた感想

#### ◆ 渡航・宿泊・交通

- ヴィザの取得はサポートのおかげで容易だった。
- ホテル、食事も良かったし、大学ー宿泊施設間の交通（無料循環バス）も便利だった。
- バス停がホテルの前であればよかった。
- レストランのアドバイスが欲しかった。

#### ◆ 会場

- 駅からやや遠い点を除けば、神田外語大学はコンパクトで、キャンパス内での移動もし易かったし、案内も親切で良かった。
- 会議の場所とホテルが一箇所にまとまっていたほうが便利だった。
- ICCEES 世界大会を祝う看板や垂れ幕などを準備すべきではなかったのではないのでしょうか。これだけの国際学会を開催しながら、それに相応しい華やかな歓迎ムードがキャンパスに感じられな

かったように思います。

- 千葉以外への旅行の観光案内や旅行会社デスクがあればよかった。
- 食事の量が十分ではなかった。
- 大会の時期と場所・会場については再検討の余地はなかったものか。
- 部屋の冷房がきかなくなり、耐え難く暑くなった（複数）。

#### ◆ 運営

- 全てこの上なく素晴らしくオーガナイズされていた。
- このような猛暑の中で、不便なロケーションの会場で行ったにもかかわらず、組織・運営が素晴らしかったことは賞賛に値する。
- レセプションでの食事の質は素晴らしかった。
- 事務局長の松里先生があまりに多忙で、話す機会がなくて残念だった。
- プログラム冊子のデザインが斬新で、いままでの大会のものとは一風違って面白かった。
- ボランティアのTシャツのデザインがよかった。お土産に買いました。
- 親切な若い研究者ボランティアたちに助けられた。彼らの笑顔を見ただけで、来たかいがあったと思った。

#### ◆ プログラム

- 会議は、1セッションの報告者が多すぎたために、議論を十分に深めることが出来なかったように思う。セッションの数、報告者とも減らして、もっと時間を取って1セッションの中身を濃くした方がよいのでは。
- 最初のほうに興味深いパネルが集中し、後半はあまり傑出したパネルがなかったように思う。
- もっと東欧の参加者が多ければよかったと思います。
- ウクライナに関するイブニングパネル (Did They Have Alternatives? The Ukrainian Turmoil from Local Perspectives) について。ゲストに偏りがあったように思う。クリミアやドネツク人民共和国以外からの参加者も呼ぶべきではなかったか？
- 文学シンポジウム (8月7日) の顔ぶれは素晴らしく、ICCEES 世界大会ならではの豪華な企画だったが、討論の時間がなく、準備した原稿を読み上げるだけになって残念だった。質疑応答をもっとしてほしかった。

## 10. 成果発表

大会でいかに多くの優れた研究成果が報告され、活発な討論が行われたとしても、それだけでは言わば「打ち上げ花火」に終わってしまう恐れがある。大会での報告と討論をもとに論文が活字になり、学会誌に掲載され、また単行本になることによって、本大会の成果が広く世に問われ、持続的な影響力を持って学界の発展に貢献することになるだろう。そのため組織委員会は、事後的な成果物刊行も大会実施の重要な一部と見なし、そのため出版経費の一部も予算に計上した。

ただし本大会では多様な分野にわたって膨大な報告が行われたため、これまでの ICCEES 世界大会の場合と同様、その全体をまとめて刊行することはもとより不可能である。組織委員会は、今後の本格的な論集刊行という事業は主催者である ICCEES（国際本部）および JCREES（日本の学界代表機関）の両者に委ねることとし、両者とともに検討を重ねた結果、両組織がそれぞれ編集主体となって本大会で行われた研究発表からテーマ別に選りすぐって、以下のように欧文・和文二系統の論文集を編纂するということで合意した。

### （1）ICCEES 編欧文論文集

編集責任者 Andrii Krawchuk サドベリ大学教授（ICCEES 副会長）。

世界的に出版事情が厳しくなる中、「世界大会の成果論文集」という位置づけでは有力出版社が出版を引き受けてくれないので、世界大会に提出されたペーパーを中核としつつも、独立した論文集として通用する水準のものが求められている。これまでの世界大会後は、10冊強の論文集が刊行されてきた。

現在、クラフチュク教授の呼びかけにより、巻のテーマと編纂者の候補を検討中である。特に編集者は、巻の編集をできるだけの学術的・語学的な能力が求められるだけでなく、出版社とのタフな交渉をやり抜かなければならないので、世界大会の成果出版物が何冊出るかは、編集を志願する同僚が何人現れるかによると言っても過言ではない。また、2020年の次回世界大会までに刊行するのが望ましいので、あまり時間的な余裕はない。

すでに提案されているテーマは、「ウクライナ危機と東アジアにおけるロシアのイメージ」「スラヴ・ユーラシア世界における移民問題」「20～21世紀の文学と女性」「ユーラシアと中東欧における記憶と歴史」「ポスト社会主義コンテクストにおけるジェンダー問題」「共産主義の記憶」など。

### （2）JCREES 編和文論文集

ICCEES 幕張世界大会の日本側主催者である JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）では、上記の欧文論文集とは別に、日本人の研究者による論文を中心に、日本語でやはりテーマ別の論文集のシリーズで刊行することを計画している。

編集には JCREES 幹事に組織委員会の中心メンバーが加わり、「政治・国際関係」「経済」「歴史」「文学・芸術」「社会・宗教」の5巻程度を予定している。出版社は東京大学出版会を予定して交渉中である。刊行は2017年秋から2年程度のうちに行う予定。

その他、個別のパネル別の論集刊行や、個別の研究報告の学会誌投稿などは、各パネルの組織者・

報告者に委ねられているため、組織委員会ではその全体を把握することはできないが、本大会で行われた報告の相当数はすでに各種学会誌に発表されるか、これから発表されることになる。

現時点で組織委員会が把握している個別刊行物（学術誌など）としては以下のものがある。

(1) 論文集 «Разнообразие русской культуры 20-го века / Diversity of Russian Culture in the 20th century» (20世紀ロシア文化の多様性) 科研費基盤研究 (B) 「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会に関する跨橋的研究」(研究代表者:沼野恭子、課題番号:15H03192) による出版。2016年2月刊、171ページ。幕張大会での報告8本(英語・ロシア語)を収録した Proceedings である。

(2) 『れにくさ』第6号 特集=ロシア・中東欧 *After Makuhari Special Issue: Russian, Central and East European Studies and Japan* (東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室論集) 2016年3月31日刊、559ページ。刊行費用は東京大学文学部現代文芸論研究室の大学運営費による。

ICCEES 幕張世界大会の経験を踏まえ、日本におけるロシア・中東欧文化・文学研究の現状と将来を考える趣旨の特集号。ICCEES 幕張世界大会組織委員会事務局を務めた現代文芸論研究室としての大会総括の他、大会報告をもとにした論文8本(日本語・英語)を掲載している。

(3) "Specila Cluster on ICCEES World Congress," in *Japanese Slavic European Studies*, vol. 36, pp. 3-56. ICCEES 幕張世界大会の意義について総括した巻頭論文 Kimitaka Matsuzato, "Slavic Eurasian Studies in the World after Makuhari" 他、3本の大会関係論文を収める。

(4) 野中進・初内裕子・沼野恭子編『世界のなかの日本文学——旧ソ連諸国の文学教育から』埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書8、2016年6月刊、148ページ。ICCEES 幕張世界大会の一環として実施された研究プロジェクト「世界文学のなかの日本——旧ソ連圏の文学教育をめぐって」(東芝国際交流財団助成)の成果報告書。

## 11. 総括——成果と展望

### 【アジアで初めての大会】

第9回中欧・東欧研究国際協議会（ICCEES）世界大会は、ICCEESが5年ごとに開催する、旧ソ連・東欧地域に関わる人文・社会科学研究分野で世界最大規模の国際会議である。1974年の第1回から数えて当大会で9回を迎えるが、これまではすべてヨーロッパまたは北米で開催されてきた。幕張で開催されたこの第9回大会は、欧米以外の場所で初めて行われた大会であり、ICCEESにとって歴史的意義を持つものとなった。欧米から遠い日本で従来通りの参加者数を確保できるか、主催者側には不安もあったが、長い準備期間を通じて幕張大会の意義を世界の学界関係者に積極的にアピールした努力が実って、従来の大会と遜色のない1310名の参加者を集めることができた。その大半が遠路はるばる来日した海外からの参加者であったことを考えると、今回の大会は規模の観点から見ても成功であったと評価できる。

今回の幕張大会の会期中に開催されたICCEES国際カウンシル会合は、次回のICCEES世界大会を2020年にモンテリオールで行うことを正式に決定した。ICCEESが世界組織である以上、西欧、アジア、北米、旧社会主義圏で開催地のローテーションをはかるのが理想であろう。幕張大会は、ICCEES史上初めてのアジアにおける大会として、このような世界組織にふさわしいあり方に向けての転換となったという点でも意義を持つものだった。

### 【日本からの国際発信と国際交流の活性化】

ロシア・中東欧研究は近年日本においても飛躍的な発展をとげ、様々な分野で個々の研究者の努力を通じて、国際的な交流が活性化しているが、全体として見ると、まだ言語や制度上の壁もあって、国際的には広く認知されているとは言いがたい。しかし、この分野最大の国際会議を日本で開催し、多くの日本人研究者が報告・討論参加することにより、今回、日本におけるロシア・中東欧研究の水準の高さを国際的にアピールすることができた。会議は全面的に英語またはロシア語で行われ、日本の研究者の研究成果を国際発信するまたとない機会となった。

組織委員会および日本の関連諸学会は特に若手研究者がこの大会で発表することを奨励したため（ロシア史研究会、日本ロシア文学会、ロシア・東欧学会が拠出した寄附金は、主として若手研究者の大会参加の助成のために使われた）、多くの若手が国際的な学術交流の現場に日本にいながらにして参加することができた。この経験は若手研究者にとって、今後のさらなる国際的学術活動をうながすものとなった。

日本の研究者にとって、世界の第一線の研究者たちとこの機会に交流できたことは学問的な大きな刺激となり、今後の日本におけるこの分野の国際的水準での発展につながるものと期待される。その一方で、外国から来日した研究者たちにとっても、これまであまり広く知られていなかった日本の高い研究水準と優れた研究者を知ったことは大きなプラスであったと考えられる。ロシア・中東欧研究における学術交流は、この幕張の大会を直接のきっかけとして、今後世界的にますます活発になることが期待される。

### 【アジアからの視点】

この大会がアジアの日本で行われたことの直接的な効果は、欧米で開催されていた従来の大会に比べて、ロシア・中国・中央アジア・モンゴル・インドなどからの参加者の比重が飛躍的に大きくなったことに現れている。

そのおかげで、従来の大会ではともすれば欧米の研究者の視点からやや一方的にロシア・中東欧を見るという傾向があったのに対して、今回の大会はロシアやアジアの研究者の視点も欧米の研究者と拮抗するくらいに打ち出された。その結果、ロシア・中東欧研究におけるアジアおよびロシアのプレゼンスを高め、欧米の見方だけを偏重するのではない、真にグローバルな性格を持つ大会となった。またロシアをめぐる様々な問題については、政治・経済・国際関係はもちろんのこと、宗教・文学・芸術などの分野においても、欧米の研究者とロシアの研究者の見解が食い違うことがしばしばあるが、今回の大会は欧米とロシア双方からの多くの参加を得て建設的な対話をすることができ、日本が言わば、学問的に欧米とロシアを媒介する場となりうることを示した。

### 【社会への還元】

今回の大会は、ロシア・中東欧との文化交流や政治・経済・国際関係上の様々な関係を視野に入れたものであるため、専門的な研究者だけでなく、日本の経済界から一般市民にまでいたるまで幅広い層の関心を惹くものとなった。そういった関心に応えるため、千葉商工会議所の協力を得て、事前にロシア・中東欧に関する「ユーラシア世界を知るための市民教養講座」を全9回にわたって開催し、延べ約450人の聴衆を集めた。また会期中には、「元首相サミット——中国、ロシア、韓国、日本の元首相が中国台頭を論ずる」(8月3日、日本から福田康夫元首相、韓国からハンスンジュ元外務部長官・駐米大使、ロシアからセルゲイ・ステパーシン元首相が参加)、国際シンポジウム「スラヴ文学は国境を越えて——ロシア、ウクライナ、ヨーロッパと日本」(8月7日、国際的に著名なスラヴ圏の作家シーシキン、クルコフ、ウグレシッチを招待)、特別シンポジウム「制裁とビジネス」などが学会外の広範な聴衆にも開かれた形で開催され、政治・経済・文学に関わる日本の様々な層の関心に応えた。

準備・実施の過程においては、地元の千葉との緊密な協力関係を重視し、千葉県、千葉市、千葉商工会議所、神田外語大学、ちば国際コンベンションビューローの関係者各位から多大な物質的・精神的援助を賜った。それに対して、組織委員会の側からも、研究成果の還元・学術的啓蒙といった面で様々な努力を行った。具体的には、上記の千葉市民を主な対象とした市民教養講座や、会期中に公開で行った複数のシンポジウムの他、学会運営のための市民・学生ボランティアの積極的活用、千葉商工会議所主催「まち歩きガイド」への協力などが挙げられる。

### 【出版物を通じての成果発表に向けて】

大会でいかに多くの優れた研究成果が報告され、活発な討論が行われたとしても、それだけでは言わば「打ち上げ花火」に終わってしまう恐れがある。大会での報告と討論をもとに論文が活字になり、学会誌に掲載され、また単行本になることによって、本大会の成果が広く世に問われ、永続的な影響力を持って学界の発展に貢献することになる。そのため組織委員会は、事後的な成果物刊行も大会実施の重要な一部と見なし、出版経費の一部も予算に計上している。

ただし本大会では多様な分野にわたって膨大な報告が行われたため、これまでのICCEES世界大会の場合と同様、その全体をすぐにまとめて刊行することは不可能である。組織委員会は、今後の本格的な論集刊行という事業は国際母体機関であるICCEES(国際本部)および共催者である日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)両者に委ねることとし、両組織がそれぞれ編集主体となって本大会で行われた研究発表からテーマ別に選りすぐって、欧文・和文二系統の論文集(総計で10巻程度にのぼることが想定される)を今後2年程度の時間をかけて編纂・出版することで合意した。このような形での研究成果の出版は、幕張大会の後、次



回大会までに残された重要な課題である。

### 【反省——ロシア・ユーラシア・中東欧研究、さらには人文社会科学の未来に向けて】

この種の報告書の性格上、ここまでどうしても「成果」を強調する記述が中心になったが、単なる自画自賛に終わらないためにも、最後に、大会の組織・実施の経験を通じて見えてきた様々な問題についても触れておこう。もちろん単なる反省のための反省ではなく、学界・学問の将来の発展につながることを願ってのまとめである。

第一に組織上の問題。ICCEESはロシア（旧ソ連）・中東欧地域に関わる人文社会科学のありとあらゆる分野をカバーする総合的な学会連携組織であり、単一の分野を専門的に扱う学会ではない。その大会を組織する以上、組織委員会の側も政治学、国際関係論から、歴史、文学、宗教、芸術、言語に至るまで様々な専門家が集まった混成部隊となった。最終的に34名にもものぼった組織委員会の顔ぶれを見ると、その所属は日本全国、27の大学と2つの研究機関に及んでいる。この多様性は大きな力ではあるが、当然、まとまった組織として意思決定をし、実務に取り組んでいくのは容易ではなく、大会関係者との連絡の際にも混乱が生じるようになった。そもそも創設当初は、物理的に固定された事務局の場所さえない状態だったのである。準備の様々な実務を担った組織委員はみな研究者として本務を持つ以上、自分の本来の仕事を犠牲にしてまで、組織委員会の仕事に携わることは難しい（募金活動のために多大な時間を割いて企業回りをしたのも、今では懐かしい思い出ではあるが）。そもそも組織委員は「善意のボランティア」であって、職責上の義務として組織委員会に加わったわけではない。

幸い、準備の進展とともに事務局体制も確立し、組織委員会の会合を定期的で開催して、組織委員会および協力者との連絡を密にとり、民主的な意思決定のプロセスを尊重しながら組織としての統一性を保つことができ、無事開催にこぎつけることができた。関連する日本の諸学会の連携のためには、ICCEESの共催者として位置付けられるJCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）が、ある時点からはICCEES幕張大会を全面的に支援する態勢を取るようになって、大きな役割を果たした。

こういった組織上の問題は、分野横断的な事業に自発的に取り組む場合、当事者が必然的に直面する問題ではあったが、実際にはそのようなことは何も考えずに走り出した我々は、直面する問題の一つ一つにその場その場での対応を迫られることになった。いまから振り返れば、そうしてやっていくしかなかったのだが、他方、今後ますます増えていくと思われる分野横断型・分野融合型の大規模国際学会を学界の自発的な努力によって——官製ではなく——組織する場合、組織上の問題は「走り出す」前にもっと徹底的に考えておくべきではなかったか、という反省もある。

第二に、社会的支援の枠組みについて。上記のような、十全とは言えない組織によって準備が始まったわけだが、そもそも組織委員の多くは専門研究者・大学人としては優れているにせよ、この種の社会的な事業を得意とするわけではない。大部分の組織委員にとって、そもそもこの規模の国際学会に関わることは生まれて初めての「未知との遭遇」だった。果たしてこのような大規模国際学会を自分たちの手で成功させられるのだろうか、という不安があったことも確かである。

そうであればこそ、大会準備・実施の様々な局面で「世間知らず」の組織委員たちを暖かく支援し指導してくださった皆様が、大会成功のために果たした役割は、計り知れないほど大きい。支援・協力してくださった関係機関・企業名などは、本報告書第2章で挙げてあるので、ここでは繰り返さないが、協力者の皆様にはいくらお礼を申し上げても十分ということはない。

しかし、その反面、この種の国際学会を支援し、実現させるための社会的枠組みについては、当事者としては、必ずしも学会の目的と合致してないと思われる面もあり、違和感を覚え、関係者とうまくコミュニケーションが取れていないと感じさせられることもあった。自然科学・医学などの分野であれば、研究内容に直結した大企業などからの資金援助も受けやすく、学会の社会的意義も説明しやすいが、人文社会科学系の学問ではだいぶ趣が違う。国際学会支援を、いわゆる MICE 誘致という側面からだけではなく、学術振興のための文化事業として、学会の研究内容に即してきめ細かく行う仕組みを考える必要がある。学会当事者（研究者）と、誘致に関心をもつ MICE 事業振興者、そして支援する地方自治体や企業などの間をとりもつ、専門的知見を持ったファシリテーターの養成も考えなければならないだろう。人文社会系の学会の場合、じつは贅沢をしなければそれほど巨大な予算は必要ではない。組織委員会側がありがたく思うのはむしろ、関係者の理解と円滑なコミュニケーションとモラル・サポートである。ちなみに、ヨーロッパの都市で行われた過去の ICCEES 世界大会の場合、比較的小さな町だったということもあって日本の場合とは単純には比較しにくいだが、町のコミュニティ全体が文化事業として取り組むという幸福な一体感が感じられた。

しかし、考えてみれば、人文社会系の学問の国際学会開催に様々な困難が伴うのは、我々の ICCEES だけに限った孤立した問題ではもちろんないだろう。それは、直接目に見える成果をもたらさない（ように見える）、社会的需要の少ない（ように見える）学問に対して、このところ特に強くなり始めた逆風の中では、むしろ人文社会系全体に関わる一般的なこともかもしれない。現代世界において次々に生ずる紛争や対立の数々は、ウクライナ危機や北方領土問題を考えればすぐにわかるように、一義的な回答を簡単に導き出せるものではないし、大会参加者たちのイデオロギー的立場も、ロシア、中国、日本、欧米ではそれぞれ和解除し難く異なっている。そういった難問について即効性のある解答や解決を求められても我々はあまり役に立たないだろう。しかし、学際的な視点で考え、多様な見解を持つ他者との対話を通して、世界に対する批判的な見方を深めるとともに自分を深く知ることこそが、人文・社会科学の本領である。このような大規模な人文社会系の総合学会が、いま日本で開催され、成果を収めたことはやはり大きいと言わざるを得ない。ただし、それを一回で終わる「打ち上げ花火」にはせずに、今後のさらなる人文社会科学の振興へとこの経験をつないでいきたい。

そういった未来への展望を考える場合、表には現れないし、数字にも換算できないことだが、強く期待することがある。それはこの大会に参加した若手研究者たちが（日本人に限らず、外国から来た研究者も含めて）刺激を受け、今後さらに世界の異なった立場の他者との対話を通じて国際的な研究を展開していくようになるということだ。特に、われわれの組織委員会で多大な時間とエネルギーを費やして活動した中堅・若手研究者たちにとって、この経験は自己犠牲を伴う苦しいものであったかもしれないが、この経験が将来必ず豊かに生かされると期待したい。普段顔を合わせることも稀な、専門も立場も違う研究者たちがいっしょに力を合わせ、不可能と思われたことを成し遂げた——この経験は、何よりもまず、学問の未来にむけての明るい展望を切り開くものである。ロシアの詩聖プーシキンも『エヴゲニー・オネーギン』で、こう書いていた——「どんな年でも恋には負ける / しかし、若く純潔な心には / その激情も恵みとなる / 野原を襲う春の嵐のように / 情熱の雨の中、若い心は生き生きとよみがえり、成熟していく」。ICCEES 幕張世界大会は真夏の前代未聞の酷暑のさなかに行われたが、その経験は若い研究者にとってはこのような春の嵐であった。

## 付録

- (1) アンケート結果
- (2) 読売新聞 2015年9月12日夕刊記事「中・東欧研究 千葉で盛大に世界大会」(沼野充義執筆)
- (3) 大会の公式チラシ(加藤賢策氏デザイン)
- (4) <ユーラシア世界を知るための市民教養講座>シリーズ2のチラシ
- (5) 国際シンポジウム「スラヴ文学は国境を越えて—ロシア、ウクライナ、ヨーロッパと日本」の  
チラシ
- (6) 亀田真澄「第9回国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)幕張世界大会を終えて」(『ユーラシア研究』  
第53号、2015年12月)

## アンケート結果

ロシア東欧の文化と芸術 第1回 ロシア小説と音楽への誘い 講師：望月哲男・亀山郁夫	
本日の講義内容についてのご意見	
望月先生の講義は一般の人にもわかりやすかった。19世紀のロシア文学と風景描写との関係について一通り分かった。亀山先生の講義は、心をつかむお話で楽しく拝聴した。最後にロシアの作曲家を一覧のよう紹介なさった時の皆さんの反応が良かった。	
著名な先生方の意外な側面を見られつつ、ロシアの芸術を垣間見れた。	
風景を通じて人間を描くというお話、ロシアの小説家達の自然や風景のまなざしの変化など、とても興味深かった。	
ロシア文学は何度も挑戦しても何故か挫折してしまっていたが、未知の世界が開かれた気がする。	
望月先生のロシアの作家6名についての風景を切り口とした講義は面白かった。また久しぶりにロシア文学を読んでみたいと思った。	
亀山先生の子供の頃からの音楽との関わりの話はとても興味ぶかかったが、もう少しロシアの音楽について聞きたかった。	
亀山先生の熱意溢れる講義に感銘を受けた。	
望月先生の講義内容／テーマが難しく理解できなかった。	
小説の風景描写は読むのが大変でしたが、こんな見方があるのかと感動しました。	
亀山先生の情熱にゆさぶられました。	
風土・絵画・音楽と文学との関わりが広がりをもって頭に入った。	
亀山先生のソ連国歌の話は共感した。	
文学・音楽とも想像していた方向性と違って残念だった。世界文学・昭和40年前後はロシア文学が何故日本で優位だったか、ロシア民謡が義務教育に取り入れられたか知りたかった。	
望月先生の講義は、絵画論に通じる楽しいものだった。	
亀山先生のお話を聞いてCDを買う予定です。	
今回の様な内容についての書籍は専門的すぎる人が多いが、一般人にもわかりやすかった。	
小説を読むときに風景描写の心情が強く反映されていることを知り、今後の読書の際に参考にしたい。	
亀山先生の声が良かったです。	
講義の実施方法についてご意見（難易度・資料・機材・時間帯・会場など）	
聴講者の数に対してちょうどよい会場。大きなスピーカーがあって聞きやすかった。	
冷房がつよかった（教室が寒かったという意見多数）。	
静かな会場で良かった。	
シリーズ1のちらしに開始時間が14:30と書いてあったで時間を間違えてしまった。開始時間が変わるということを書いて欲しかった（同じクレーム多数）。	

誰か助手をつけた方がよかったのでは？沼野先生お一人で大変そうだった。
後ろの席からは、スクリーンが見えづらかった。
もっと沢山曲を聞きたかった。
もっと大きな絵でみたかった。
レジュメが欲しかった。
今後の講義についてご要望
ぜひ、東京・大阪・福岡・札幌などで一般に向けた今回のような高名な先生方の講座を設けてほしい。
旧ソ連を含めたロシア映画の現状、他の東欧、中欧諸国の文化講義を聞きたい。
映画の話が聞きたい。
宗教や民俗の話が聞きたい。

ロシア東欧の文化と芸術 第2回 目と耳の快樂—ロシアの美術と詩歌 講師：鴻野わか菜・坂庭淳史
本日の講義内容についてのご意見
ロシア現代美術作品について初めて知ることができた。
坂庭先生の講義で、ロシア語の音を初めて楽しみました。ロシア語を初めて聞きましたが、リズムカルで耳に心地よかった（同意見多数）。
今回の講義をきっかけとしてロシアの現代美術にもっと触れていきたい。
内容が難しかった。
鴻野先生の声が美しかった。芸術家が国から制約を受けながら生きる苦悩についておっしゃっていましたが、その中でも発展していて希望がもてました。
ロシア語やロシア語の朗読が聞けて、文字や訳だけでは表現しきれない魅力が伝わりました。
素人にもついていけるよう良く工夫されていた。分かりやすかった（同意見多数）。
改めてプーシキンを読みたいと思いました。
鴻野先生の講義は内容も語りも素晴らしかった。
自分でも俳句をするが、以前からカラマーゾフの兄弟などを読んで、俳句と共鳴するものを感じていた。この点をさらに深めることで、日本文化を見直すきっかけになると思う。
坂庭先生のお話で、俳句との共通点を見出しました。今後の句作で参考にしたい。
鴻野先生の講義は短い時間にロシア現代美術の流れがよく理解できた。地方都市において、いろいろな催しが行われていることは知らなかった。
講義の実施方法についてご意見（難易度・資料・機材・時間帯・会場など）
鴻野先生の講義のスライドが変わるのが早すぎた。

2つとも内容が濃く、数回に分けて聞きたいものだった。
もっと細かいレジュメが欲しい。
千葉市内で開催された事自体が画期的でした。継続して「ロシア文化」関連の催しがあればと思います。
マイクの音が小さい。
今後の講義についてご要望
どの講義も面白かったもっと聞きたい。

<p>ロシア東欧の文化と芸術</p> <p><b>第3回 踊るロシア、観るロシアーバレエと映画</b> 講師：村山久美子、佐藤千登勢</p>
本日の講義内容についてのご意見
映像があって飽きること無く聴くことができた。語るバレエ、語らないバレエはなるほどと思いました。バレエにセリフがあったと聞いて納得しました。
映画は、こういう見方があるのかと感心しました。「夏の終止符」のパーシャには全く共感できなくて、友人に「これはコメディーだ」と言われて、そうかと思っていたのですが…。
バレエは個人的にもう少し演技を見てみたかった。
映画の映像をたくさん見せていただきありがとうございました。
バレエの講義はわかりやすく、大変よく印象に残りました。ソ連時代に東京公演に来たジダーノフ、ウラノワ等が脳裏に蘇ります。ウラノワの神秘的な舞台は素晴らしかった。
最近の動きや変化も合わせて話して欲しかった。先日マイヤ・プリセツカヤが急死されたこと。新しいモスクワバレエとフランス、イギリスの関係。
バレエ嫌いの初心者の私にも良く理解できました。語るバレエの視点で鑑賞してみます。
父、あるいは父のイメージって辛いものがありますね。母もまたしかりですが、それが死につながるテーマになるってロシアの政治って深刻だと思いました。歳をとると苦しい映画は避けるようになりました。芸術（表現）ですから、確かにテーマとして相応しいと理解できました。
ロシアバレエの歴史、フランスの影響が分かった。
父と子の関係は人種・国家が違っていても同じ様なことが存在している。
村山先生：断片的な知識が一つにつながるきっかけになりました。バレエ・リュス以降についても音楽は知っているが、踊りを知りたくなりました。
佐藤先生：知らない映画と監督ばかりだった（ソクーロフあたりまで知っている）キリスト・旧教との関連をもっと深く、独自の解説が欲しかった。ご本を読んでみたい。
バレエは大好きなのですが、プティパがどの時代の人かもしらず、恥ずかしいことでした。大変よくわかり楽しかったです。もう少し、フィルムを観たいと思いました。
あまり見る機会のないロシア映画を興味深く面白く聴くことができました。
今後、ロシアのバレエや映画を鑑賞する時は、ただ観るのではなく、本日まで紹介頂いた新しい視点を持って、より楽しむことが出来ると思います。面白い講義でした。

踊りと音楽の関係は初めて知ることができました。
映画の深刻さ・暗さが気になった。スターリン時代だからではないか、風土よりも。
講義の実施方法についてご意見（難易度・資料・機材・時間帯・会場など）
会場が寒い（同じ意見多数）。
映像資料を使用していたので、内容が明確であった。よく工夫されている。
入門編としてはちょうどよい。
すべて良かった。
もう少し時間が長ければ尚良かった。
今後の講義についてご要望
ロシアと旧ソ連圏のことをわかりやすく解説してください。
このシリーズ、場所を変えてぜひ続編の実施を望みます。

<p>ロシア東欧の文化と芸術</p> <p><b>第5回 スラヴ文化の広がり</b> 講師：スロヴェイ、松尾、亀田</p>
本日の講義内容についてのご意見
スラブ圏の3国については以前から興味がありました。これまで知らなかった事柄が多かった。特にポーランドの作曲家の情報発信が少ないのに驚かされました。西欧偏重の弊害と思います。
どれも興味深かったが、亀田さんのお話が面白かった。話が聞きやすかった。
研究分野などでは、「スラヴ」という枠組みで捉えるのはごく自然なことですし、例えば、ロシアに関心を持つ人がポーランドのことに興味をもつようになるというもよくあることだと思いますが、こうした括りで話題となったり講座が開かれることはあまり無いように思う。今日はそういう点で貴重な機会だった。
ウクライナピサンカの装飾デザインについて面白く聞きました。
ショパンから始まって、ポーランドの音楽家は興味深い。国がないということは、アイデンティティをどこに見つけ出すか大変なことです。ショパンにはもう少しせめて50代まで、生きて作曲して欲しかった。
知識を深めることができ大変勉強になった。ロシア圏について知っている様で、何も知りませんでした。
多様な講演を聴講してきたが、本日の音楽は近年にないヒットでした。
本当のマルクスレーニン主義についても良くわからないのに、東西冷戦の様態を今も引きずっているのは興味深かった。
ロシアの踊り、クラシックダンス、ディアギレフのダンスについての一連の講演は素晴らしかったです。
ウクライナについて：いろいろなピサンカの模様について詳しく解説していただいて参考になりました。
ポーランドについて：国民音楽をタイプ別に教えて頂き分かりやすかった。
旧ユーゴスラヴィア：取り扱う範囲が広いために、深く掘り下げにくいのでしょうか。

知らないことが多く、ひたすら理解に努めました。新しい世界を知ることができ楽しかった。特にユーゴの講義は面白かった。
ウクライナに興味があり、スロヴェイ氏の発表が特に面白かった。
若い講師の方の視点や感性が新鮮でした。今後の活躍を期待しています。
ユーゴノスタルジーは、国がなくなったとはいえ、すでにノスタルジーなのかという思いがした。
マスコミを通じた話ではない話が聞けたのが、このシリーズの良さでした。
今日のテーマに関しては、無理矢理感が強い。とりとめのない話。3名とも面白かったが。
ウクライナ文化について、卵の模様付けが大変おもしろかったです。日本文化に通じるものがあります。特に「鹿」については、鹿島→奈良の鹿信仰に共通します。
ショパンも日本の俳句に通じます。俳句にもテーマはない。テーマは各人勝手にくみとるもの。
ユーゴスラヴィアのお話は現代に示唆することが多いと感動しました。
音楽に疎かったが、興味が湧いた。
ウクライナ：ピサンカと刺繍の模様の意味が興味深かった。写真が多く分かりやすかった。
ポーランド：短い時間の中で多くの情報が得られた。ショパンの音楽に対する見方が変わった。他のポーランドの音楽家についても初めて聞いた。
ユーゴスラヴィア:「ユーゴノルタルギア」という言葉、短い時間の中でもよく理解できた。中味が濃い講義だった。
一日で複数のテーマの講演が聞けるのが良かった。
<b>講義の実施方法についてご意見（難易度・資料・機材・時間帯・会場など）</b>
今回のみ、講師が3人で時間も長めだった。毎回このくらい盛り沢山だと良いと思う。
何故、もっと早くこのような機会をつくってくれなかったのか残念に思います。
2-3回に分けてもいいくらい今回は内容が充実していました。
全体を通してスライドの移動が少しはやすぎた。
資料（ハンドアウト）があったほうがいい。メモをとるのに忙しく、スライドの写真をゆっくりみれない。（同じ意見多数）。
<b>今後の講義についてご要望</b>
今後も旧ソ連・東欧圏の情報発信を継続してください。
ロシア以外の「スラヴ」についてまた学べる機会があれば、ぜひ参加したい。
サッカーの話は今度はしてほしい（同意見2つ）。
今日で最後になるのが残念。また別の機会に同様の講座を企画して欲しい。
語学に特化した講義をやってもらいたかった。
ウクライナ情勢やロシア情勢に関する教養講座があれば非常に良いと思う。



# 対話と批判 人文社会系の本領



沼野 充義

今年の八月三日から八日まで、ある巨大な国際学会が、日本学術会議との共催により、千葉市(幕張メッセおよび神田外語大学)で開催された。千葉市長や神田外語大学学長の支援を受け、関係者一丸となつての努力が実つたのである。学会の正式名称(略称ICCEES)は第9回国際中東・東欧研究協議会世界大会という。ソ連・東欧研究と呼ばれていた分野の現在の現図形である。

## 中・東欧研究 千葉で盛大に世界大会

「シベック」とも呼ぶべき大きなイベントだ。今回の幕張大会には、ロシア、アメリカ、ドイツ、イギリス、カザフスタン、中国、韓国など、世界五〇か国から二二〇〇人以上が参加した(そのうち八〇〇人近くが外国から来日した研究者)。記録破りの証書の中、幕張はユーラシアの思吹を呼び込んだ。私たちが掲げたスローガンの通り、幕張は人多くの西と多くの東が出会う場所になったのである。

強調しておきたいのは、これが人文社会系の真に総合的・学際的な学芸だということ。政治、経済、国際関係から、歴史、社会、文学、芸術、言語、宗教に至るまで、あらゆる専門分野で最新の研究成果が発表され、みな外の委属を忘れるほど熱い対話を——いくつか例を挙げれば、ポスト社会主義時代の比較政治学、ロシア革命の歴史的影響、古代スラヴ語のテキスト読解、ロシア正教と政治、東欧文学の詩学などについて——繰り広げられた。

現代世界において次々に生ずる紛争や対立の数々は、ウクライナ危機や北方領土問題

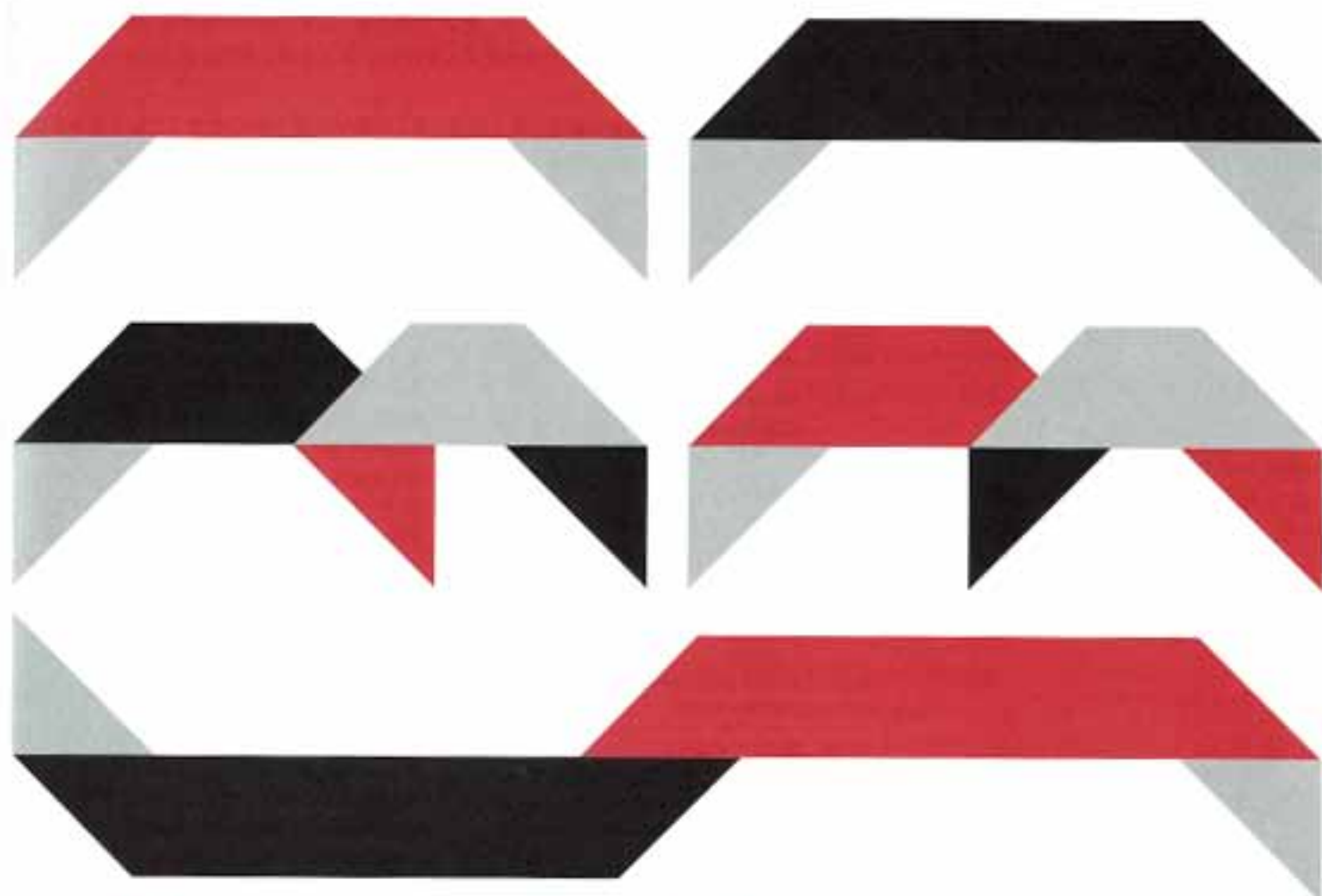


シンボジウム「スラヴ文学は国境を越えて」に参加したウクライナのシレーキンスキと米旅行作家のクルコフさん(向かって右)とアレクサンドル氏(左)

この六月に文部科学省が出した通知は、この分野に社会的需要が少ないかのように言い立てたうえで、国立大学に組織の廃止や縮小を促すという驚くべきものだったが、そのような人文社会系軽蔑ともとれる指摘がちょうど打ち出された直後、未曽有の規模の人文社会系の総合学会が白幕で開催され、成果を収めたことをどう受けとめるべきだろうか。

「大砲がうなりをあげる時でも、ミューズ(時の女神)は沈黙しない」というスローガンを掲げたこのシンボジウムでは、「マイタン革命(旧政権を倒したキエフでの政変)を最近に目撃したキエフ在住のクルコフが、『ウクライナ作家と戦争』について語り、かつてリベラルな言論活動ゆえに『魔女』の烙印を押しされてクロアチアから亡命せざるを得なくなったウクレシッチが文学と政治の複雑な関係を論じた。そして何よりも、作家は国家体制を変えることはできない。それでも沈黙してはならない。もしも沈黙したら、いま国の中で起ころうとしていることに賛同することになる」というシレーキンスキの鋭然とした言葉が胸を打った。文学者の言葉の力を改めて感じさせる貴重な場であった。

沼野の「みつよし」1985-4年出版、東京大学出版会  
日本ロシア・東欧研究協議会  
国際代表部幹事、「幕張」の編  
ユートピア文学館で読書会  
開催



The IX World Congress of ICCEES in Makuhari, Japan

第9回国際中欧・東欧研究協議会

幕張世界大会 2015年8月3日[月]→8月8日[土]

8月3日 幕張メッセ 8月4日-8日 神田外語大学 一日入場料 10,000円(大会プログラム付)

事前にお申し込みいただきますと当日の受付がスムーズです。

お得な全額現金登録割引もございます。

[http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/index\\_japanese.html](http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/index_japanese.html)

# 第9回国際中欧・東欧研究協議会幕張世界大会

The IX World Congress of ICCEES in Makuhari, Japan

2015年8月3日から8日にかけて、千葉市幕張で国際中欧・東欧研究協議会略称ICCEES〔イクシーズ〕の第9回世界大会が開催される運びとなりました。ICCEESは旧ソ連・東欧圏の研究に携わる世界の学会を糾合した、国際組織で、その視野はロシアを中心としながらも、中欧・東欧諸国、ウクライナ、コーカサス、中央アジア、モンゴル、中国にまで、及びます。ICCEESは5年に一回、世界大会を開催してきましたが、この大会が欧米の外で行われるのは史上初めての画期的なことです。旧ソ連諸国、欧米、アジアなど60以上の国々から1500名近くの研究者の参加が見込まれており、あらゆる専門分野にわたって最新の研究成果が発表され、討議される予定です。

今年の夏、幕張はユーラシアの息吹を呼び込みます。私たちは、アジアで初めての世界大会を、〈多くの西と多くの東が出会う場所〉にすることを目指します。

〔組織委員長 | 下斗米伸夫(法政大学)・沼野充義(東京大学) 事務局長 | 松里公孝(東京大学) 顧問会議代表幹事 | 田中哲二(中央アジア・コーカサス研究所所長)〕

## 大会スケジュール ※時間等は変更になる場合があります

### 8月3日[月]

会場 | 幕張メッセ(千葉県千葉市美浜区中瀬2-1)

10:00 レジストレーション(参加登録)

15:00 開会式

15:30 オープニング企画  
「元首相サミット：ロシア、韓国、日本の元首相が中国台頭を論ずる」  
※同時通訳付き  
パネリスト  
福田康夫(日本)  
セルゲイ・ステパーシン(ロシア)  
李洪九(韓国)

17:30

18:00 ウェルカム・パーティー

19:00

### 8月4日[火]～8日[土]

会場 | 神田外語大学(千葉県千葉市美浜区若葉1-4-1)

### 8月4日[火]

9:30 パネル・ラウンドテーブルセッション  
18:00 (4部構成×25会場)

18:30 レセプション

20:00

### 8月5日[水]

9:30 パネル・ラウンドテーブルセッション  
18:00 (4部構成×25会場)

18:30 特別シンポジウム企画  
「変化する世界のユーラシア：東西関係のなかの北極海と極東」  
※英語/ロシア語(通訳なし)

国際シンポジウムロシア  
「革命研究の最前線——100周年に向けて」  
※英語/ロシア語(通訳なし)

20:00

## 関連企画

「ユーラシア世界を知るための市民教養講座」 ※予約不要・当日先着順(定員96名)・入場無料

5月20日、27日、3日、6月10(全4回)

シリーズ1 「今後のユーラシア動向」

6月13日、20日、27日、7月18日、25日(全5回)

シリーズ2 「ロシア東欧の文化と芸術」

会場 | 千葉商工会議所12階 研修室A(千葉県千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館)

### 8月6日[木]

9:30 パネル・ラウンドテーブルセッション  
18:00 (4部構成×25会場)

18:30 特別シンポジウム  
「現地から見るウクライナ動乱」  
※英語/ロシア語(通訳なし)

パネル・ディスカッション  
「東アジアにおけるロシア文学研究・翻訳」

20:00

### 8月7日[金]

9:30 パネル・ラウンドテーブルセッション  
18:00 (4部構成×25会場)

18:30 国際シンポジウム  
「スラヴ文学は国境を超えて——ロシア、ウクライナ、ヨーロッパと日本」  
※一般公開(無料)、逐次通訳付き

パネリスト  
ミハイル・シーシキン(ロシア)  
アンドレイ・クルコフ(ウクライナ)  
ドゥブラフカ・ウグレシッチ(クロアチア)  
多和田葉子

イヴニング・セッション  
「制裁とビジネス」  
※一般公開(無料)

20:00

### 8月8日[土]

9:30 パネル・ラウンドテーブルセッション  
13:00 (2部構成×25会場)

13:30 閉会式  
14:00

14:30 フェアウェル・パーティー  
16:00

## プログラム

本大会では政治、経済、国際関係、人類学、境界研究、歴史、社会学、教育、ジェンダー、文学、芸術・メディア、言語、言語教育、宗教学、哲学、社会保障、法律、脱領域研究398のパネル・セッション、52のラウンドテーブル・セッションが予定されており、様々な分野の研究報告が行われます。パネルおよびラウンドテーブルの詳細については、オンラインプログラムをご参照ください。

[http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/japanese\\_program.html](http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/japanese_program.html)

## 参加申し込み

幕張世界大会には、どなたでもご来場いただけます。

一日入場料 **10,000**円(大会プログラム付)

事前にお申し込みいただきますと当日の受付がスムーズです。お得な全期間登録割引もございます。チケットの詳細と登録方法につきましては、大会HPをご参照ください。  
[http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/japanese\\_tickets.html](http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/japanese_tickets.html)

## 主催

国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)

日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)

日本学術会議

## 後援・協力団体

後援 | 外務省、千葉県、千葉市、観光庁、日本政府観光局(JNTO)、日本ベンクラブ、千葉県商工会議所連合会、千葉県観光物産協会、ちば国際コンベンションビューロー、神田外語大学、日本貿易振興機構アジア経済研究所、国際問題研究所

助成 | 東芝国際交流財団、国際交流基金、科学研究費・基盤研究「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超越的枠組みを求めて」

協力 | 東京大学文学部現代文芸論スラヴ語スラヴ文学研究室、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、ロシアNIS貿易会

## お問い合わせ

国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)

第九回幕張世界大会組織委員会事務局

住所 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学文学部現代文芸論研究室内

電話/ファックス 03-5841-7955

(電話対応時間 月～金10:30-17:00)

メールアドレス:makuhari@l.u-tokyo.ac.jp

## 【シリーズ2】ロシア東欧の文化と芸術（全5回）

コーディネーター：沼野 充義（第9回 ICCEES 幕張世界大会組織委員長／東京大学）＋野中 進（埼玉大学）

今年の8月に開催される国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）第9回世界大会を記念し、この大会の準備のために様々な形でご協力くださっている皆様に感謝の気持ちを表すために、千葉商工会議所のご協力を得て、市民教養講座を千葉市で開催することになりました。

\* 6/13と7/25は、科研費基盤研究（A）＜越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて＞（研究課題番号：25243002、代表者 沼野充義）との共催企画になります。

\* 予約不要（当日先着順、定員 96 名） / 入場無料 / 聴講自由（満席の場合は立ち見をお願いすることもありますので、予めご了承下さい）

日程：2015/6/13, 20, 27, 7/18, 25（土曜）  
時間：14:00～16:30（6/13, 20, 27, 7/18・開場 13:30）  
14:00～17:00（7/25・開場 13:30）  
会場：千葉商工会議所12階 研修室 A（千葉中央ツインビル2号館）

### 6/13 第1回 文学のヴィジョン、音楽のエクスタシー ——ロシア小説と音楽への誘い

講師1：望月 哲男（北海道大学特任教授、日本ロシア文学会会長）

ドストエフスキー『罪と罰』の主人公も、トルストイ『アンナ・カレーニナ』の主人公も、自分の世界を空間的・時間的なイメージとして捉えています。彼らはどんな風景の中で考え、どんな時間感覚にとらわれているのか。そんな観点から、ロシア文学と我々の世界との関係について考えてみたいと思います。

講師2：亀山 郁夫（名古屋外国語大学学長）

チャイコフスキーを筆頭に、ムソルグスキー、ラフマニノフ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、そしてショスタコヴィチ——ロシアの作曲家たちはなぜかくも私たちの心を揺さぶるのか？ エクスタシー（恍惚）とノスタルジー（郷愁）に満ちた、ロシア音楽の秘密に迫ります。

司会：沼野充義

### 6/20 第2回 目と耳の快楽——ロシアの美術と詩歌

講師1：鴻野 わか菜（千葉大学准教授）

ロシア現代美術の魅力について、多数のスライドと共に紹介します。ソ連崩壊後の文化の状況の変化や、モスクワ、ペテルブルクの美術館・ギャラリーについてもお話しします。

講師2：坂庭 淳史（早稲田大学准教授）

「詩の国」とも言われているロシア—この講座では現在でも人々に愛されている詩をいくつか紹介します。美しく、豊かに表現された自然、愛、自由、音の響きやリズムについて解説しながら、ロシアの詩の魅力に迫っていきます。

司会：野中進

### 6/27 第3回 踊るロシア、観るロシア——バレエと映画

講師1：村山 久美子（舞踊史・舞踊評論家）

『白鳥の湖』ほか数々のバレエの名作を生み、スーパースターを輩出し続けているロシア・バレエは、長年世界の称賛の的であり続けています。そのようなロシア・バレエの歴史と現状のお話で、魅力

を十分にお伝えします。

講師2：佐藤 千登勢（法政大学准教授）

ソ連・ロシア映画の伝統は、緻密なモンタージュや圧倒的な映像美、深い象徴性によって支えられてきたと言っても過言ではないでしょう。このたびは、『パパって、何？』、『父、帰る』、『夏の終止符』のソ連崩壊後に制作された三作品を通し、「父殺し」のテーマの変遷についてご紹介します。

司会：野中進

### 7/18 第4回 暮らしと食へのまなざし——ロシアの歴史と食文化

講師1：池田 嘉郎（東京大学准教授）

戦争や革命の続く20世紀ロシアで、人々はどうのような暮らしを送っていたのだろうか。また権力者と人々の関係はどうなものだったのだろうか。スターリン時代を中心に考えてみよう。

講師2：沼野 恭子（東京外国語大学）

ロシアの食文化の歴史を絵画や文学や写真によってたどりながら、西欧化による貴族の食と農民の食の分離、ロシア古来の料理と外来の料理、お茶とサモワールの意義、ソ連時代と現代の食生活などについてご紹介します。

### 7/25 第5回 【シンポジウム】スラヴ文化の広がり ——ウクライナ・ポーランド・旧ユーゴスラヴィア

講師1：V・スロヴェイ（翻訳家・通訳）

ウクライナの伝統的な模様を組み込まれたウクライナ人の文化と世界観、特にイースターエッグ（ピサンキ）や刺繍の色、模様に入れられた意味をご紹介します。

講師2：松尾 梨沙（東京大学大学院博士課程）

世界中で愛される作曲家ショパン。一方、あまり知られていない彼の祖国ポーランドの音楽史。ショパン以降現代に至るまで、ポーランドの作曲家たちは彼とどう向き合ったのか。楽曲分析を交えて検証します。

講師3：亀田 真澄（東京大学助教）

社会主義ユーゴスラヴィアは自主管理社会主義に基づき、ソ連陣営と西側陣営のあいだでハイブリッドな文化を発信していました。本講義では、そんな時代のことを懐かしむ、「ユーゴノスタルジー」の様々なあり方についてご紹介します。

司会：沼野充義

## ＜ユーラシア世界を知るための市民教養講座＞ 【シリーズ2】 ロシア東欧の文化と芸術 (全5回)

この【シリーズ2】は、ロシア東欧の文化と芸術に関する総合的な入門講座です。日本でも人気の高いロシアの文学・音楽・美術・バレエ・映画などを中心に、ロシアの歴史的背景や食文化も紹介し、さらにウクライナ・ポーランド・旧ユーゴスラヴィアなどのロシア以外のスラヴ諸国の文化・芸術のありかたも視野に入れ、毎回2名の講師が登場するという大変欲張った企画です(最終回はシンポジウム形式で講師は3名)。ロシア東欧の文化や芸術に関心をお持ちの方にとってはまたとない機会となることと思います。

### 講師プロフィール (登壇順)



望月 哲男 (もちづき てつお)：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター特任教授、日本ロシア文学会会長。ロシア文学。編著書『創像都市ペテルブルグ——歴史・科学・文化』(北海道大学出版会)、訳書トルストイ『アンナ・カレーニナ』(光文社)、ドストエフスキー『白痴』(河出書房新社)など多数。2010年、ロシア文学翻訳賞をロシア科学アカデミーより授与される。

亀山 郁夫 (かめやま いくお)：東京外国語大学学長を経て、現在、名古屋外国語大学学長。ロシア文学・芸術・音楽。著書『甦るフレーブニコフ』(平凡社)、『磔ロシア』(岩波書店、大佛次郎賞)、『謎解き「悪霊」』(新潮社、読売文学賞)など。訳書ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』『悪霊』(光文社)など多数。2008年、ロシア政府よりプーシキンメダルを授与される。



鴻野 わか菜 (こうの わかな)：千葉大学文学部准教授。ロシア文学・芸術。特にカバコフなどの現代美術に詳しく、日本での展覧会組織にも貢献してきた。訳書にイリヤ&エミリア・カバコフ『プロジェクト宮殿』(共訳)、レオニート・チシコフ『なぜをひいたおつきさま』他。

坂庭 淳史 (さかにわ あつし)：早稲田大学文学部准教授。専門は19世紀ロシア詩・思想。主な著書に『プーシキンを読む—研究のファースト・ステップ』(ナウカ出版)、『フォードル・チュッチェフ研究—19世紀のロシアの「自己意識」』(マニュアルハウス)、訳書にアルセーニ・タルコフスキー『雪が降るまえに』(鳥影社)。



村山 久美子 (むらやま くみこ)：舞踊史家、舞踊評論家。読売新聞舞踊舞台評を現在に至るまで25年間担当。早稲田大学、昭和音楽大学、桐朋学園芸術短期大学他で、非常勤講師として舞踊論、ロシア・バレエ史、ロシア語、ストリートダンス実技を担当。著書に『二十世紀の10大バレエダンサー』(東京堂出版)他。

佐藤 千登勢 (さとう ちとせ)：法政大学国際文化学部准教授。専門は20世紀ロシア文学、ロシア映画。著書『シクロフスキー 規範の破壊者』(南雲堂)、『映画に学ぶロシア語』『チェブラーシカ』(東洋書店)、共著書『ロシア文学への扉』(慶應義塾大学出版会)など。



池田 嘉郎 (いけだ よしろう)：東京大学大学院人文社会系研究科准教授。専門は近現代ロシア史。主な仕事は、著書『革命ロシアの共和国とネーション』(山川出版社)、訳書シュテュルマー『プーチンと甦るロシア』(白水社)、編著『第一次世界大戦と帝国の遺産』(山川出版社)。

沼野 恭子 (ぬまの きょうこ)：東京外国語大学総合国際学研究院教授。ロシア文学、比較文学、食文化。主な著書に、『アヴァンギャルドな女たち——ロシアの女性文化』(五柳書院)、『夢のありか—「未来の後」のロシア文学』(作品社)、『ロシア文学の食卓』(日本放送出版協会)、ウリツカヤ、クルコフ、ペトルシェフスカヤなどの現代ロシア文学の翻訳多数。



ヴィヤチェスラフ・スロヴェイ：翻訳研究者・翻訳家。ロシア語・ウクライナ語・英語・日本語の概念メタファーに現れる世界観の比較その翻訳の問題を研究。シェフチェンコ記念キエフ国立大学卒、東京大学大学院人文社会系研究科現代文芸論研究室博士課程満期退学。

松尾 梨沙 (まつおりさ)：東京大学総合文化研究科博士課程在籍。専門は音楽学、比較芸術、特にシヨパン研究。論文に『シヨパンの文体と音楽構造——新たな分析方法をもとめて』(超域文化科学紀要 17)など。



亀田 真澄 (かめだ ますみ)：東京大学文学部助教。専門は、ロシア東欧における共産主義政権下の文化研究。著書『国家建設のイコノグラフィ——ソ連とユーゴの五カ年計画プロパガンダ』(成文社)、共著書『アイラブユーゴ ユーゴスラヴィア・ノスタルジー』(社会評論社)。

### 【シリーズ1】 今後のユーラシア動向

日時：5/20、5/27、6/3、6/10 (いずれも水曜開催)  
18時30分～20時30分(開場18時)

会場：千葉商工会議所12階 研修室A

### 司会者プロフィール

沼野 充義 (ぬまの みつよし)：東京大学文学部教授、元日本ロシア文学会会長(2009～13年)、現在日本ロシア・東欧研究連絡協議会代表幹事。ロシア・ポーランド文学、文芸評論。著書に『亡命文学論』(作品社、サントリー学芸賞)、『ユートピア文学論』(作品社、読売文学賞)など。

野中 進 (のなか すずむ)：埼玉大学教養学部教授。ロシア文学・思想・批評理論。共編著に、『ロシア文化の方舟—ソ連崩壊から20年』(東洋書店)、『いま、ソ連文学を読み直すとは』(埼玉大学教養学部)、『ロシア・フォルマリズム再考—言語・メディア・知覚』(せりか書房)など。

主催 日本ロシア・東欧研究連絡協議会 (JCREEES)  
第9回国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) 幕張世界大会組織委員会  
協力 千葉商工会議所

問合せ先  
東京大学文学部現代文芸論研究室内  
ICCEES 幕張世界大会組織委員会事務局  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
電話・ファックス：03-5841-7955  
E-mail：makuhari@l.u-tokyo.ac.jp  
HP：http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/

# スラヴ文学は国境を越えて

Slavic Literature without Borders

— ロシア・ウクライナ・ヨーロッパと日本 —

-Russia, Ukraine, Europe, and Japan-

2015.8.7 [金] 18:30~20:00 [開場18:00]

神田外語大学(千葉市幕張) 4号館 101番教室

国境なきスラヴ文学団からの世界へのメッセージ

大砲がうなりをあげる時でも、ミューズは沈黙しない

The Muses do not stay silent, when the Cannons Roar

国際紛争が激化し、ナショナリズムに煽られて民族間の憎しみが増幅していく現代世界にあって、

文学はどのような役割を果たすことができるのか。

スラヴ作家たちは世界にどんな平和のメッセージを伝えることができるのか(あるいは、できないのか)。

暑い夏の夜、幕張に集まって、政治上の対立や国家の境界を超えて語り合います。

## パネリスト

ミハイル・シーシキン(ロシア/スイス) Mikhail Shishkin

アンドレイ・クルコフ(ウクライナ) Andrei Kurkov

ドゥブラフカ・ウグレシッチ(クロアチア/オランダ) Dubravka Ugrešić

討論者 多和田葉子(ドイツ/日本) Yoko Tawada

司会 沼野恭子(東京外国語大学) Kyoko Numano

\*使用言語:ロシア語、英語、日本語。逐次通訳つき。

\*一般公開。入場無料、予約不要。どなたでも聴講できます。ただし座席は大会公式参加者用200名、一般市民200名です。

満席の場合は立ち見をお願いする場合がありますので、あらかじめご了解ください。

企画: 沼野充義(国際中欧・東欧研究協議会幕張世界大会組織委員長)

助成: 国際交流基金、新潮文芸振興会

科学研究費助成基盤研究(A)「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」

後援: 日本ペンクラブ 協力: 日本ロシア文学会(会長・望月哲男) 東京大学文学部現代文芸論研究室

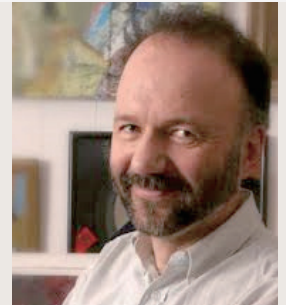
# スラヴ文学は国境を越えて

— ロシア・ウクライナ・ヨーロッパと日本 —

## Panelists パネリスト

### アンドレイ・クルコフ    Андрій Юрійович Курков

キエフ在住のロシア語作家(1961年生れ)。キエフ外国語大学卒業。日本語を含め25か国語に翻訳されている。とくに『ペンギンの憂鬱』はそのユーモア、サスペンス仕立てのエンターテインメント性が世界的な人気を呼んだ(沼野恭子訳、新潮社、2004年)。現在、ウクライナでもっとも有名な作家の一人である。ウクライナ・ペン副会長。ウクライナの立場を代表する形で昨今のウクライナ状況についても積極的に発言を行い、『マイダン日記』が出版された。この本の邦訳は『ウクライナ日記——国民的作家が綴った祖国激動の155日』(吉岡ゆき、ホーム社、2015年)。他に『大統領の最後の恋』(前田和泉訳、新潮社、2006年)がある。



### ミハイル・シーシキン    Михаил Павлович Шишкин

現代ロシアを代表する作家(1961年生れ)の一人。モスクワ教育大学卒業。とくに長編小説のジャンルで非常に高い評価を受けており、国内外の多くの文学賞を受賞。小説は主にロシア語で執筆しているが、最近ではエッセイ等をドイツ語で書いている。代表作の一つ『手紙』は日本語に翻訳されている(奈倉有里訳、新潮社、2010年)。現在スイス在住だが、モスクワとバーゼルの間を行き来している。最近のロシア・ウクライナ間の紛争についても、ヨーロッパ的な価値と民主主義を擁護する立場から積極的に発言している。短編の邦訳に『バックベルトの付いたコート』(沼野恭子訳、『新潮』2011年5月号)がある。



### ドゥブラフカ・ウグレシッチ    Dubravka Ugrešić

アムステルダム在住のクロアチア語作家(1950年生れ)。ザグレブ大学で比較文学とロシア文学を学び、卒業後はザグレブ大学文学理論研究所に勤めた。ロシア文学やロシア・アヴァンギャルドの研究者でもある。旧ユーゴスラヴィア内戦に際して反戦・反ナショナリズムを唱え猛烈な攻撃にさらされ、1993年亡命。作家・エッセイストとして国際的に大変高い評価を受け、ヨーロッパの多くの文学賞を受賞している。邦訳に、文学的エッセイ集『バルカン・ブルース』(岩崎稔訳、未来社、1997年)の他、短編『君の登場人物を貸してくれ』(三谷恵子訳、『世界文学のフロンティア2 愛のかたち』岩波書店、1996年)がある。



### 討論者 | 多和田葉子    Yoko Tawada

日本語・ドイツ語の二言語作家として活躍する作家・詩人。1993年、『犬婿入り』(講談社)で芥川賞受賞。1996年、ドイツ語を母語としない作家に与えられるシャミッソー賞を受賞。2005年、ゲーテ・メダル受賞。欧米では朗読・音楽とのコラボレーションによるパフォーマンス活動を精力的に行っており、国際的にもっとも高く評価される現代日本作家の一人である。



### 司会 | 沼野恭子    Kyoko Numano

現代ロシア文学研究・翻訳家。東京外国語大学教授。NHKのテレビロシア語会話講師も務めた。著書に『夢のありか—「未来の後」のロシア文学』(作品社)、『ロシア文学の食卓』(NHK出版)など。クルコフ、オクジャワ、トルスタヤ、アクーニン、ウリツカヤ、ペトルシェフスカヤなどの小説の翻訳がある。

### 交通案内

JR京葉線「海浜幕張」駅 下車  
徒歩約15分    バス利用約5分

JR総武線「幕張」駅 下車  
徒歩約20分

JR総武線「幕張本郷」駅 下車  
バス利用 ①約8分 または ②約15分

京成電鉄「京成幕張」駅 下車  
徒歩約15分

※所要時間には、電車の待ち時間・乗り換え時間等は含まれておりません。

### お問い合わせ

国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)幕張世界大会組織委員会事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学文学部現代文芸論研究室内

■ TEL&FAX.03-5841-7955(電話対応時間 月~金10:30~17:00)

■ Mail. makuhari@lu-tokyo.ac.jp

第9回

国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)  
幕張世界大会を終えて

亀田真澄

2015年8月3日から8日までの6日間にわたって、国際中欧・東欧研究協議会(The International Council for Central and East European Studies、略称ICCEES)の第9回世界大会が千葉市幕張で開催されました。ICCEESとは、ロシアを中心に、旧ソ連圏、中欧・東欧諸国をフィールドとする研究に携わる各国の学会を糾合した地域研究の国際組織で、1974年以降、5年ごとに世界大会を開催してきました。最近では2000年にフィンランド(タンペレ)、2005年にドイツ(ベルリン)、2010年にスウェーデン(ストックホルム)で開催されましたが、今回は欧米の外で行われた初めての世界大会です。本大会の運営は、下斗米伸夫(法政大学)・沼野充義(東京大学)両委員長、松里公孝(東京大学)事務局長の強力なイニシアティブのもとで進められてきましたが、2014年7月より東京大学文学部現代文芸論研究室に事務局を設立することとなり、北井聡子さん、島袋里美さん、中里敦子さんという大変頼もしいスタッフに支えられながら準備をしてきました。

ICCEES世界大会の特徴は、なんといっても規模の大きさでしょう。今回の世界大会は、欧米から見ると地理的には悪条件とも言える日本での開催であったにもかかわらず、ベルリン大会に次ぐ、史上二番目の規模の世界大会となりました。本大会には1310名が参加し、うち1209名の研究者が政治、経済、国際関係、歴史、社会、法学、文学、言語、芸術、宗教など数多くの専門分野にわたって最新の研究成果を報告し、活発な議論が行われました。本大会の第二の特徴としては、参加者のうち日本人が427名であるのに比べて、外国人は783名と、日本で開催される国際学会としては外国人の比率の高さが際立っていたことも挙げられます。参加者を国別で見ると、日本(427名)、ロシア(166名)、アメリカ合衆国(112名)、ドイツ(67名)、フィンランド(49名)という順番で、あわせて50も

の国と地域からの参加がありました。

初日は幕張メッセで、開会式と、福田康夫氏とセルゲイ・ステパーシン氏の元首相、韓国からは元外相の韓昇州氏を招いてのオープニング企画「元首相サミット：中国、ロシア、韓国、日本の元首相が中国台頭を論ずる」を開催しました。二日目以降は神田外語大学(幕張)で、いわゆる学会「本体」が始まりました。パネル・セッション(3名の報告者と、各1名の司会と討論者から構成される)、あるいはラウンドテーブル・セッション(より自由な参加形態での討論)での研究成果発表が、30近い会場で同時進行するかたちです。今回は、ウクライナ危機などの世界情勢のために、予定されていた研究報告のキャンセルが相次いでしまったものの、それでも333のパネル・セッション、46のラウンドテーブル・セッション、あわせて379のセッションが無事に行われました。今回開催されたセッションについては、幕張世界大会HPからオンラインプログラム(<https://c-linkage.com/abs/iccees2015/program/program2.php>)をご参照いただけます。そのなかから、ほんの一部ですが、本大会のセッションを分野ごとにご紹介いたします。

【国際関係】「新しい地政学的現実の形成：ウクライナ危機をグローバルな観点から見る」、「ブリュッセルとモスクワの間：東欧における外交施策」、「ウクライナ危機以降のロシアとBRICs：東に向くか、南に向くか?」、「プーチンのアジア太平洋政策：アメリカと中国への新しい挑戦」、「東アジアとその周囲におけるエネルギー外交」

【歴史】「幕末～明治の長崎とロシア人」、「シベリア抑留の再検討：ドイツ人捕虜との比較」、「満州の亡命ロシア人女性」、「冷戦とデタントを振り返る」、「グルジアにおける宗教と民族のポリティクス」

【政治・法学】「ユーラシア政治体制の力学を理解する」、「ロシアのナショナリズム：新しいアジェンダ」

【社会学】「イスラム、共同体および国家」、「移民、(脱)都市化と社会ネットワーク」

【境界研究】「境界とユーラシア：アラル海危機



と(超)境界]、「アルタイにおける境界空間：政策とコミュニティー」

【環境】「スラヴ圏ユーラシアと日本における原子力の社会的リスクマネジメントと市民保護」、  
「旧共産圏における環境とエネルギー保障の関係：ポーランド、ロシア、中央アジア」、  
「エネルギーか環境か？ 持続可能な発展をめぐる旧共産諸国のディレンマ」

【文学】「全体主義を生き延びるとは作家にとって何を意味したのか」、「亡命作家たちによるロシア古典文学の創造的再評価」、「戦間期における中欧諸文学」、「ポスト・ソヴィエト文学における帝國的多民族性と間民族性」

【宗教】「中国とロシア極東の古儀式派」、「ロシアと中央アジアのイスラム」、「欧州とアジアの境界横断的相互作用の原動力としての仏教：19～20世紀のハンガリー、バルト地域、カルムイク草原」

【経済】「ロシアの人口の過去と未来：ジェンダーと家族の役割」、「旧ソ連・東欧諸国の民族間関係と経済：ガガウス・黒海・ウクライナ」、「統合過程にある西バルカン諸国：良き統治と反腐敗」

【言語学】「帝国の影の中で：ウクライナにおける言語政策」、「南スラヴ諸国(旧ユーゴ構成国)における言語風景と文字表象」

【哲学】「ソヴィエトとポスト・ソヴィエトにおける哲学文化：連続か断絶か?」、「ロシア嫌悪の神話としての『スラヴ主義』：真実を求めて」

【芸術・映画・電子媒体】「紛争のおそれのある旧共産圏におけるメディアの役割」、「日本とロシア：舞踊の伝統における相互関係」、「社会主義戦争映画における敵の表象：ソ連、中国、ヴェトナムの比較」

【ジェンダー】「ロシア・ジェンダー運動の三世代、1970年代、1980年代、2010年代の比較」、「ハンガリーと旧ユーゴ地域における女性の役割」

【ユダヤ研究】「破滅とユートピア：1918年から1948年の中欧・東欧におけるハンガリー系ユダヤ人知識人とビジネスエリート」

いわゆる大会「本体」に加えて、毎日のセッション終了後には、特別ゲストを招いての本部企画も行われました。「変化する世界のユーラ

シア：東西関係のなかの北極海と極東」(8月5日)、「ロシア革命研究の最前線：100周年に向けて」(8月5日)、「現地から見るウクライナ動乱」(8月6日)、「東アジアにおけるロシア文学研究・翻訳」(8月6日)のほか、8月7日には一般公開の二つのシンポジウム「スラヴ文学は国境を越えて：ロシア、ウクライナ、ヨーロッパと日本」と「制裁とビジネス」が開催されました。

多くの分野に跨るICCEES幕張世界大会の学術的意義をひとことで表すことは不可能ですが、とにかく日本という欧米諸国からは離れた場所であっても、世界からの研究者たちがこのように多数集まり、活発な議論を交わしたという事実は、中欧・東欧研究における日本の存在感を高めるのに十分だったと言えるでしょう。そして、多くの参加者たちが朝から晩まで学会会場にいたので、参加者の皆様にネットワークの機会をより多く提供できたと考えています。炎天下の幕張という、あまり外に出たくない条件だった、ということも影響したでしょうが、むしろ趣向を凝らした毎日の催し物や懇親会の重要な成果だったと思います。

大会当日には多くのボランティアの皆様にご協力いただきました。会場となった神田外語大学の学生35名、千葉市の市民ボランティア49名が会場誘導や案内を担当して下さったほか、主にロシア・東欧地域をフィールドとする学部生・院生や研究者48名にも大会運営の実務面にかかわっていただきました。高額な参加費のため、登録受付の業務には細心の配慮が必要でしたし、また猛暑が続くなかでの開催であったためエアコンが次々と不調になるという事態に見舞われましたが、大きな問題もなく、無事に大会を開催することができました。本大会の実施にご尽力くださった皆様に、心より感謝いたします。第10回となる、次回のICCEES世界大会は、2020年にカナダのモントリオールで開催されます。

(かめだ ますみ・東京大学文学部／第九回国際  
中欧・東欧研究協議会(ICCEES)幕張世界大会  
事務局次長)

**第9回国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) 世界大会**